
東方適応志

簾笥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方適応志

【著者名】

簾笥

N4837N

【作者名】

【あらすじ】

ちょっとしたことから大昔の東方の世界に行ってしまった少年のお話

注意書き

いつも、おはようございます。 いんにちは、 いんばんは
この小説を書かせてもらひつ筆箇と申します。

この小説を読むに当たって注意してもらいたいことがあります。それは

オリキャラあり 原作崩壊 キャラ崩壊 驄文 更新不定期
東方Projectの二次創作 主人公最強系 僕設定満載

上のものが苦手な方は戻ることをお勧めいたします。

だとといふことです。

「そんなのどんどんバッヂコーナー」な人は見ていただくとうれしい
です。
それでは本編どうぞ。 東方適応志です。

第一話 ～異世界そして人間卒業？～

いま僕は知らない森にいる。

「どうだ？ここ」と、とりあえず素数を数えて落ち着いつ
「1 2 3 5 7 11」

つてそんなことをしている場合じゃねえ それに1は素数じゃねえ
どうしてこうなったか思い出す

時 数十分前に戻る

「暇だ・・・・」そう思ったのでなんとなく山に向かった。ここは
家族との思い出の場所なのだ。

この辺は一般的に田舎といわれる場所なので山が多くあり、
出入りが簡単なのだ。その山道を歩いていると・・・

「こんなのがあったか？」大きい洞窟があつた。

なんとなく興味がわいたので入つてみると
しばらく進んでいると一瞬地響きがしたと同時に出口と見られる光
が見えた。

そこをでると

現在に至るわけである

つまり洞窟をでたらここにいたわけだ。

「じゃあどうくつをひきかえせば・・・」

その言葉を言い終わる前に僕はその光景に絶句した。文字通り言葉
が出なかつた

振り向くとそこには洞窟ではなく大きな壁があのだ。
そう洞窟「だった」場所はなくなり、かわりに「壁」があつた・・・

「できないことに焦つても仕方ない とりあえず動こう」「もともと細かいことは気にしない性格なので近くに町がないか探すこととした

視界が悪いが目はいいほうなので何とかなるだらう。

しばらく歩くと人（仮）を見つけた

え？なぜ（仮）だつて？そりやあ額に角をつけている人なんて、少なくとも俺は見たことがない。それに格好からするとありや鬼か？もしかしたらとんでもない大昔か異世界に来てしまったらしい。何だよ鬼つて。

いくらなんでも無理があるだろ。

まさかマジで異世界か？だつたら帰れる場所探さないと。

「誰だお前 この辺では見ん顔だな 人間か？」

やべえ、鬼（？）が話しかけてきた デリする？適当にいじまかせる相手じゃないし

「まあ妖怪か人間かは戦えばわかるか」

まずいぞ あいつ殺るき満々だ適当に返事をしないと・・・
「いや俺は人間だ。気がついたらここにいた」

「ハツハツハ なかなか面白いことを言う人間だな」

「いや、嘘はついていない。そうだ一つ質問いいか？」

「そうだな俺に勝つたら質問を受けてやる。行くぞー」

いやいやいや ヤバイヤバイって 鬼に勝てだつて？クソッ 逃げ
るしかねえ

鬼の攻撃を紙一重でかわす。が、勢いあまつて転んでしまった

「ほう、かわすとは人間にしてはやるな どんどん行くぞ！」

まずい 転んで動けない 鬼はどんどん近づいてきてるつてのに・
・・！

鬼が手を大きく振りかぶる！

嫌だ

嫌だ

嫌だ嫌だ嫌だ

死にたくない

死にたくない死にたくない

死にたくない死にたくない死にたくない

「こんな感じで死んでたまるかああああ

体の中で何かがはじけたような気がした。それから何秒たつただろうか。もしかしたら1秒も起つていなかつたかもしれない。だがいつまでたっても痛みがこない。その上、体の周りに何かが取り巻いているような気がする。

恐る恐る皿を開けると数m吹っ飛んだ鬼がいた

「むう・・・能力か、厄介だな。仕方ないあきらめるとしよう。へ？よくわからないが諦めてくれるみたいだ。そうだ今なら質問聞いてくれるか？」
「なら質問いいか？」

「約束だ　いいだろう　何の質問だ？」

「ijiは日本か？　それと能力つて何だ？」

「面白いことを聞く人間だな　日本と言ijのは聞いたことはないがここは人間からは妖怪の山といわれる。能力つていうのは　今お前が使つた技みたいなもの　体中に風がとりまいているだろ？」

「本当だ　体を取り巻いていたのは風だ

「本当だ・・・」

「その反応からすると今回が初発動か　能力は持つものによつて違うからな」

さつきの言葉からすると彼は能力持ちではないみたいだな

「じゃあ俺は行くとするか また縁があれば会おう

そういうと鬼は去つて行つた できればもう会いたくないな・・・

「能力・・・か これからどうするかなえ

妖怪の山つて言ひぐらいだ、このままだとまた妖怪とあつだらう。ひひだらう。

といふやを下らう

運良く（？）山を下りきるまで妖怪にはあわなかつた。

さらに誰も使つていない洞穴を見つけた。誰が作ったか知らんが有効活用させてもらおう

「眠い 今日はもう寝よう・・・」

ちゅうど田が沈みかけている 明日から食料の確保やら大変そうだ・



鬼との遭遇から約10年。え？ぶつ飛びすぎじゃないかつて？人生そんなモノです。

またその生活の中で気になつたことが2つある。

一つ目は「能力」が進化して（？）炎やら電気やら水やらも使ひこどができるようになったこと。

二つ目は10年もたつたのに自分の容姿が変化していないこと。

前者はいいのだが、後者は困る。

なぜなら25歳なのに中学2年と同じぐらいの身長って怪しくないか？

そもそも身長が伸びない＝人間のような成長ができていない＝人間卒業おめでとう！

なんてことになつてるかもしないからだ。ここがもといた世界ならそんなことを考えないのいのだが居る世界が世界だからな・・・

人外になつてる可能性はなくないの！10年のうち妖怪に関係したことを思い出すことにした。

うーん そこら辺のキノコやら木の実やらを食べたからか？

それは無いだろ？食べたら妖怪化する食べ物なんて聞いたことが無い。

それとも能力を使いすぎたからか？（主にV.S妖怪戦などで）
それも無い。能力を使ったら疲れはしたがその他に変なことはおこ

らなかつた。

能力で人間に悪戯したからとか？

妖怪は人間を襲つたりすると体力が回復したりするとか聞いたことはあるが、悪戯するだけで妖怪になつてたら大変なことになる。

そもそも能力をもてるのが妖怪だけとか？

んー それも無いかな。10年前の鬼も人間とわかつていながら能力の説明をしてくれたからな。

それとも空腹に耐えかね妖怪の肉を食つたからか？ ダウト

・・・・・ 思いつきり最後のじやねーか！

あの時は30分ほど体中が痛んだが何とかなつたんだよな・・・

つまりいまの状況を整理すると

- ・ 異次元に来て10年目
- ・ 25歳だが中2と同じぐらいの体格
- ・ 人間卒業（妖怪化）おめでとうの可能性がある
- ・ 洞穴生活

といった感じだ。

それにしてもこっちに来てもう10年か・・・向こうでは俺の存在はどうなつているのだろうか。

友達は心配しているのだろうか？妹は元気に生活しているのか？それとももう忘れてしまつているのだろうか？それとも居なかつたことになつてているのか？

存在的には失踪になつてているのだろうか？誘拐とみなされ調査されているのだろうか？

妖怪は居るし、生活はしにくいしで、すこし前までは元の世界に帰

りたいなんて思っていたが、

今ではこっちの世界に居たいとまで思っている。10年の間でそんなにも変わるものなのだろうか？

自分の心と言うものがわからない。

しかしのまま考えながら洞穴に閉じこもつていても暇なだけだ。
せっかく異世界に来たのだから楽しもつ。

「よし。明日の朝の訪れとともにここから旅立とう」

あての無い旅、つまり今までの世界ではできなかつた夢である放浪の旅つてやつだ。

いろいろな妖怪に遭遇したり、食料に困つたり、いろいろ大変だろうがそれが旅の醍醐味である。

と、俺は思つてゐる。

しかし何で他の人間とまったく接触してないのに精神崩壊を起つしないのか？

妖怪化したからか？でも妖怪も人にかかわらないと力が衰えていくつてどつかで聞いたような

まあ細かいことを気にしたらだめだな。今日はもう寝よう。

そして40年の放浪の旅をして住み着いた場所で起きることなど、
まだ俺は知る由も無いだろう。

第2話 ～放浪のたび時々月人～

旅を始めて約40年たつた。え?だから飛びすぎだつて?人生そんなもん(「や

このたびでわかつたことがいくつかある。修行をしていたと妖力やらが見えるようになった。

元人間ということか 自分の体から妖力のほかに靈力も見ることができた。

そして何よりもよかつたことは自分の能力がわかつたことである。その能力とは

「風・火・水・原子を操り発電する程度の能力」である。

まだあるようなのだがそれらはまだわからない。

能力名を聞いてピンと来ない人は発電機見たいな感じに思つてくれればいい。

そしてこの能力で一番うれしいことは「程度の能力」であること。なに?まだよくわからない?程度の能力といったらあれしかないだろ!

そう「東方Project」の世界なのである。つまりハ雲紫やら博麗靈夢がいる世界なのである。

つまり簡潔に言つと「幻想入り」したのだ(ただし幻想卿ができる前のようにだが)

そうとなれば原作キャラに会いたいのだが相当昔のようなんですねえないだろ?

なので東方のことは少し置いておこう。

そして今、俺がいる場所なのがとある村の近くの洞穴だ。そこで注目してほしいのは洞穴ではなく村なのだ

ここに住み着いたのは10年前 住み着いた当時こそ、村人は自作した槍で狩をする程度だったのだが、それから2・3年で土器を作り始めるわ米の栽培をはじめるわをしている。明らかに時代の進み方おかしいだろ！

と突っ込みたくなるのだがそれはおいておこう。俺はここまで急発達する文明はしらないが、大昔で、歴史に残らずここまで発展した人類は多分、後の月人（蓬萊人）だろう。東方の世界みたいだし。

そして月人（蓬萊人）といえば「八意 永琳」と「蓬萊山 輝夜」である。

今すぐ会いたいものだが今乗り込んでも敵対視されるだろう。それは避けたい。（幻想郷完成後に考えて）

というわけで修行をしながらその村を見守ることにした。

因みに修行内容は秘密だ。そう簡単に話したら面白くないしな。

それから半年ほどたつたがその町（発展して平安京レベルの町になつた）には俺の能力の一部の「電気」というものはまだ無い。

というわけであるいたずらを仕掛けることにした。

弱めの電気である静電気をおこすもの、つまりエレキテルを町において逃げるというものである。

え？どうやってパーティを集めたかって？もちろん俺の能力だよ。俺の能力の一部である原子。

じつは元素も操れる事が発覚したのだ。自分で創った元素を集め形にする。それでガラスやらを集めたわけだ。

フフフ どうなるか楽しみだ 町人の諸君また1ヶ月後に会おう！



エレキテルを仕掛けてからきっかり1ヶ月たつたわけだが・・・

「い、今 目にしたことがありのままでなすぜ！」

エレキテルを悪戯で仕掛けたら1ヶ月で平安京が昭和後半の都市レベルまで発展していた。

な、何を言つているかわからねえと思うが、俺も何が起こったか理解できなかつた。

発展とか、高度経済成長とかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ
もつと恐ろしいものの片鱗をあじわつたぜ・・・・

そう、上の言葉でわかるようにどういうわけか平安京レベルだった町が昭和後半の都市レベルまで発展している。

いくらなんでも静電気の起こし方をしつてもここまで発展せんどう・・・

これが月人（予定）の力なのか？怖い、怖すぎるぞ月人（予（「」）まあ、月の頭脳といわれる永琳がいるならこの発展もまだ理解できる。理解したくないが

とりあえず今日はもう帰ろう。この発展のじょうをみたら疲れてきた。寝よう・・・



エレキテルを設置してから約100年がたつた。え?だから早い

て？人（「？」）

相変わらず都市は発展し続けて平成のような都市になっていた。さらに火器などの武器を作り妖怪への警戒態勢も強まってきた。そのため永琳たちに会うのが難しくなってきた。

などと考えていると洞穴の入り口あたりに人間が入ってくるのを感じた。一応妖力を隠し警戒しておく。

人間が視界に入ってくる。赤と青の少し変わった服、赤い十字の入った青いナース帽。銀色の髪、

どこからどう見ても永琳さんです。本当に（「？」）まさか会いたい人物が自分から来てくれるなんて俺はラッキーなんだ。

その顔を見ると妖怪に追われているところを洞穴を見つけたらまた妖怪（俺）がいたってところだろう。

「どうした人間？ 妖怪に追われてここに来たのだろう？」

俺が彼女を知っていることがバレると面倒なので隠しておく。

「…………あなたは妖怪でしょ？」

なぜ自分を襲わないのか？ と不思議な顔をしている。

「ああ、俺は妖怪だ。だが人は襲わん」

「なぜ？」

「なんとなく……だ。それよりそこに隠れてる」

永琳は岩の影に隠れる。それと同時に洞穴に半人半馬の妖怪が入ってくる。

「お前。ここに人間が来なかつたか？」

「生憎だがお前に答える口など持ち合わせていない」
きつぱり答える。

「なんだと！？」

妖怪が怒つて飛び掛つてくる。俺が手をかざすと妖怪は地面にたたきつけられる。妖怪はそれならとばかりに口から火を吐く。

「ふん その程度か」

俺は水を作り消火する。そのままその水をすごい勢いで飛ばす（某モンスターのハイ〇ロポ〇プのような感じ）妖怪は吹き飛び壁に当たる。

当然そのチャンスを逃すわけも無くそこに雷をぶち込む。相手は水でぬれていますので電気をよく通す。妖怪は黒こげになつて倒れていった。

「二度と俺の領域に立ち入るな。」

俺がそう呟く。もつとも、もう動けないんだが。

すると岩陰から永琳が出てくる。

「あなた本当に妖怪？」

「なぜやつと思ひへ？」

「だつて人を助ける妖怪なんて聞いたことないわ

「フフッ そうかもな。そうだ。町のことを詳しく教えてくれないか？もう二十年ほどまともに話をしてないんだ。それがお礼って

「… 本當におかしな妖怪ね。いいわよ」と頼む。」

「… 本當におかしな妖怪ね。いいわよ」

それから1時間ほど町の話を聞いた。科学力が発達しそぎていて月に移住することが決定したこと。そして月に行くことに関して妖怪を絶滅させて地上に残る派と月に移住派で分かれていること。

永琳は月移住派らしい。月移住派の中には妖怪と戦うぐらになら月へ行くというものもいるそうだ。まあ人間と妖怪の全面戦争になるなら中立の立場に立たせてもらいつことにしよう。

「長い間話に付き合つてくれてありがとう。」

「いえいえ、私もあなたとは気が会いそうだわ。でももうすぐお別れね。」

「なあに 生きていればまた会えるぞ」

「そうね。えーと、まだ名前を聞いてなかつたわね。私はハ意永琳。あなたは?」

「俺の名前は…」

さてここで問題が発生した。こちらでの名前を考えのを忘れてたぜ。何?前の名前使えばいい?折角異世界に来たのだから過去との決別の意味を含めて名前を変えたい。

そうだな…俺は異界人だからそれを少し変えて、異界塵。いかいじん神じゃなくて塵なのは名前に神という文字を使うのはちょっとばか

し気が引けるからだ。

「俺の名前は塵、異界 嘘だ」

「それじゃあ異界 嘘。 またあえる日まで。」

そういうと永琳は去つていった。妖怪に襲われてここに来たのに一人で大丈夫なのだろうか？

まあそんなことを気にしても何も始まらない。今田はもう寝よう・・・

わざわざどうなるのか楽しくなってきた。人間が勝つか？妖怪が勝つか？それとも引き分けになるのか？
どうしてそんなに気楽でいられるかって？そりや人生楽しまなきやソソッてやつよ。

第参話 ～人と妖怪と戦い～

side 土

さて今俺はどこにいると思う？いつもの洞穴？森？都市？草原？残念全部ハズレだ。俺は今以上から遙か離れた空中にいる。なぜそんな所にいるかって？それは

時は数時間前に戻る。人間たちはいつもより騒がしかった。月派と地球派はついには対立していた。そして今日月派は月に向けてロケットを飛び立つた。そして地球派は全武力を持って妖怪に戦争を仕掛けってきたのだ。俺は洞穴にいたがどうも騒がしいので高見の見物ができるところを探した。

そしてここにきたわけだ。そして現在の戦況は人間が圧倒的有利。いくら妖怪が強かろうと未知の科学力には勝てないようだ。どんどん妖怪の数が減っていく。確かに人間の科学力はすごい。それでも妖怪たるもののがこんなにも簡単にやられるはずがない。でも少しづつ、確実に殺されていく。それはなぜか？

妖怪は元々人間に恐怖を与えるもあり恐怖の象徴そのものだ。人間に恐怖を与えることで力と姿を保つ。しかし今の人間は科学の力で妖怪を殺そうとしている。そう、恐れも知らずに。

人間から恐れられない妖怪はどうなるか？当然力が衰える。故に今の状況では簡単にやられてしまうのだ。

ならどうすればいいか？それは簡単なこと。やつらに恐怖を思い出させてやればいい。絶望を見せ付けてやればいい。死の音を聞かせ

てやればいい。

ただそれだけ。 そうたつたそれだけなのだ。

そして俺は中立という立場を続行する。 標的は人間、 そして妖怪。 とりあえずは優勢で調子に乗つてゐる人間共だ。

俺は戦場の中央に立つ。 そして炎を放ちあたり一帯を焼け野原にする。

「恐怖におののき絶望しろ！ その絶望は死を与える！」

人妖共々焼いていく。 元素を操り酸素を作る。 何時までもこの地獄の火炎が燃えるように。

その炎が燃え尽きるころ人間の都市の方角から戦闘機が飛んできて何かを落としていった。 おそらく核かなんかだろう。 しかし今なら核の炎に包まれても大丈夫な気がした。

その数と大きさ、 量からして都市には被害がないように調節されているのだろう。 そんなことを考えていると核が爆発した。 その爆発に巻き込まれる。 が俺は死んでいない。

それどころかびんびんしている上に力がみなぎつてくる。 そのとき理解した。 もうひとつ的能力を。 その名は

「ありとあらゆるものに適応し能力として使う程度の能力」

そつそれはすべてに対応する能力。 たとえそれが自然の摂理だらうと、 神の力だらうと

そしてそれを自分のものにし、 自由に操るという能力。

たとえば毒。その毒を無効化にし毒を自由に操る。

たとえば老化。老化といつ概念をなくし老いを自由に操る。

たとえば空腹。生物がエネルギーを必要とするといつ常識を消し空腹を操る。

そして核。その威力と炎を吸収しその力を操る。

これでわかった。なぜこの世界に来てすぐに風を操ることができたのか、なぜ妖怪の肉を食べて妖怪化したのか、なぜ何年たつても成長しないのか。

すべてはこの能力の力である。

当然人間たちは核の力を受けても元気そうにしている俺を見て焦る。

焦りは驚きを生む。

驚きは動搖を生み、

動搖は恐怖を作る。

恐怖をした人間は狂気に満ちる。

狂気に満ちた人間は冷静な判断ができないくなる。

戦場で冷静な判断ができない物を待ち受けるは死のみ。

ふん、馬鹿なやつ等だ。これでもまだ突っ込んでくる。レーザー砲やミサイルなど使いながら。面倒だ、一氣につぶす。

大体人間がいる中央に立つ。そして核の力を溜め

俺が気がついたときは俺を除いて人間も妖怪もいなかつた。

場所は変わり、ここはいつもの洞穴。俺はあるものの準備をしていた。

封印の儀式。そう邪悪なものなどを封印するときになどに用いる儀式である。

俺は俺自身を封印しようと思つ。理由は聞かないでくれ。神が再び人間を創造するまでこじ時間がかかるだろつ。

そして創造された人間が好奇心でパンドラの箱を開けるやうに、触れるなと言われたものを触つてしまつよつて、言ひ伝えられた絶対に解いてはならぬ俺の封印を解くものが現れるだろつ。

そんなことを考へるうちに術式が完成した。長い長い休憩になり。そうだが、自分が選んだ道。後悔はしてない。それではまた数百年、いや数千年になるかな。またあおつ。

side out

○

side とある村人

俺はただの農民。毎日水をやり雑草を抜き汗水たらしながら仕事をするただの農民だ。

だが俺はこの生活に嫌気が差していた。何度も同じ毎日を繰り返しそれでいて楽しいわけでもない。

俺の体が、脳が、神経が新しい刺激を求めている。そんな俺はあることを耳にした。

この村の西の山にはたいそう強力な妖怪が封印されているという伝説の話。普段はまったく伝説やらは信じないのだが、その話を聴いた瞬間俺の体に何かが駆け巡った。これだ！俺の日常生活を変える出来事はこれしかない！

その日から暇があれば封印を解く方法や封印された妖怪の情報をかき集めた。

そしてついに封印されている場所も、封印を解く方法も見つけた。そして伝説が本当だと言つことも確認した。

そして今日、ついに封印を解く。解き方を言つとまねする人が居るかも知れないので割合させてもらつ。

青年封印解除中

side out

side 異界 塵

この感覚。いつ振りだらうか。体に血が巡る」の感覚。数百年間の間、生きているわけでもなく、死んでいるわけでもなく、

とても短かったよつた、それで居てとても長かつたよつた、不思議な感覚だった。

まあ自分で選んだ時の過ごし方だからな。別に後悔も反省もない。ちなみにMではない。どちらかって言つとうだ。

そんな余韻に浸つていると、

「あなたは……妖怪……ですか?」

俺の封印を解いた青年がおびえながらそう呟つ。

「やうだが何か?」

「」の山に強力な妖怪が封印されているときいたもので……あ、わかつたぞ。」いつ強力な妖怪が封印されている伝説と聞いて一緒に金銀財宝があるんじやないかとか勘違いしてんじやないか?よーし、そんな悪い子にはお仕置きが必要だな。

「言つておぐが、金銀財宝神器レア者などは」」は無いぞ?」

「えつ?」と普通の人間なら聞き取れないほど小さな声で青年が呟く。

「それに俺は腹が減った。だから オレサマ オマエ マルカジリ」青年はその言葉を聴いた瞬間小刻みに震え、大量の汗をかき、腰が抜け座り込んでしまった。

きっと自分は大変なものを復活させてしまったのではないかと考えているのだろう。

「なんてな。俺は封印を解いてくれた人間にそんなことほしねえよ
青年が「え？」と言いたげな顔をする。

「おまえ宝がほしかつたんだろう？」「れやるよ」
俺は炭素を生成し集め、くつつけて形にしていく。金剛石ことダイヤモンドを作つた。

「それは？」青年が尋ねる。

「これはダイヤモンドと言つて多分この世界で一番硬い物質だ。」

「あ、ありがとうございます！」

「まあ俺は行くとするから、元気に暮らせよ」

俺はそういうながら空へと舞い上がり、能力を使い消え去るよう飛んだ。

ふふふ。ついに復活だぜ。内心ずっと封印されたままひたすらじみじょりとか思つてた。まあ自分でやったのだから文句は言えないが。
さてこれからどうするか……時期は多分諏訪大戦の少し前だろ
う。明日から情報を集めるか

第参話 ～人と妖怪と戦い～（後書き）

今日の更新はここまでです。

次は何時になるかな・・・

アドバイス・言いたいことなどがござればこましたらぜひ感想のほうを
よろしくお願ひいたします。

第?話 ～洩矢の神～（前書き）

いつも、おはようございます、じんにちは、じんばんは。作者の筆
箇です。

ここ少し報告しておきたいことがあります。

一つ目は第一話を伏線を立てるためのほんの少し文を変えました（
といつてもほとんど変わっていないが）

2つ目は永琳の名前のことなのですが、人間では発音できない名前
なので、

塵は東方でのゲームの名前を使っています

永琳は相手が発音できないのを知っているので偽名を使っています。

とこう設定で脳内補完をお願いします。

また注意書きにも書いてあるように俺設定が多く含まれているので
注意していただけると幸いです。

長々とすいませんでした。それでは第?話始まります。

第？話 ～洩矢の神～

s i d e 麼

さて今日から諏訪大戦の情報を集めよう・・・・・と思ったのだが、封印を解かれたばかりの妖怪が神の情報をかぎまわっている。なんて噂が流れたら警戒されてしまうだろ？ となるといろいろ面倒になる。

なので俺の能力のうちの風を使って情報を集めることにした。諏訪大戦に関係しそうな話だけを風に乗せて俺のところに運ぶ。俺は寝ているだけでも情報を集められるのだ。通称「風の情報ネットワーク」だ。プライバシーのしんがい？ なにそれおいしいの？ ただ待つのも暇なので修行しながら待つことにしよう。体がどれだけなまっていることやら・・・

○

あれから一週間がたった。この一週間でわかつたことがいくつかある。

まず自分の身体能力、衰えるどころか格段にあがっている。妖力や靈力が封印前のうん十倍ほどありそうだ。封印されていた間も力は増えていたようだ

そしてもう一つは諏訪大戦はまだ始まつては居ないがお互ひは戦いが始まるのことを知つていてピリピリしているようだ。

となるとどちらの神社に行くかが肝心だ。行つたところでどちらからも歓迎はされないだろうが。

まあ行くとしたら「洩矢 諏訪子」の方だな。たしか諏訪対戦は諏訪大社でおきたと思ったからそっちに行つたほうが移動がなくて楽だしね。

思い立つたらすぐ行動、というわけで行きますか。ここからそう遠くないみたいだからね

と、まあきました。一瞬で。いや~便利だね風つてのは情報収集にも使えるし移動、攻撃にも使えるからね。

まあついたつて言つても神社の近くの森なんだけどね、そりやいきなり人が神社のど真ん中に現れたなんてのは怪しいでしょ?俺だったら疑うね

靈力と妖力を隠し参拝客にまぎれて参拝していると痛みにも似た感覚が飛んできた。はい祟られます。

俺の寿命が祟りでマツハなんてことはないが嫌な感覚だね。まあ適応するから関係ないけど。

一通り見るところ見て、参拝したあと、人が居なくなるのを鳥居の下で待つことにした。当然祟りが飛んでくるけど関係ない。

1時間ぐらいたつてやつと人が居なくなつた。それでも出でこない諏訪子に呼びかけてみた。

「そろそろ祟るのやめてくれないか?」
すると諏訪子が姿を現した。

「妖怪がここに何のよつ?」

「ただの参拝だが?」

「だつたらなんできつとこひで待つていたの?祟られながら
痛いところをついてくるな・・・」

「わかつたよ。もう少しで神と神の戦いがあるんだろう?それを見に
来た」

「どうして?」

「神の本氣の力が見てみたくてね」

「変な妖怪だね。私の名前は洩矢 諏訪子、あなたの名前は?」

「俺の名前は異界 塵だ」

「異界 塘・・・あんたわつも神の本氣を見てみたいって言った
よね?」

「ん?ああ言つたが?」

なんだ?嫌な予感がする

「なら見せてあげるよ。神の本氣!」

そういうと諏訪子が両手に力を集めて鉄の輪を投げてきた。まづい

「この距離では回避できない

「くつー。」

「よしー。」

「おーおー、不意打ちはないんじゃないか？」

「神力を込めた鉄の輪を手で捕つた！？」

「生憎だが俺はお前が思つてこる以上に強いらしく

「でもどうやってー。」

「込められている神力は俺の妖力で相殺した。そうすれば飛んでくるのはただの鉄の塊。捕ることはたやすい」

「くつ、でもまだまだ！行くよー。」

諏訪子はそういうと少し離れてこれでもかと言わんばかりに鉄の輪を投げてきた

「まだ甘い・・・甘いぞー。」

鉄の元素を操り、鉄の輪を分解していく。

するとミシャグジ様が俺を祟つてきた。やつを諏訪子に祟られたとき適応したから問題ない。

が、やはり祟られるのはつづとなしい

「横槍をつ、入れるなあ！」

ミシャグジ様たちを祟りを込めて睨む。するとミシャグジ様たちは

氣絶した

「なつ！」

諏訪子が驚く。まあ自分の神力を込めた鉄の輪は消されるし、ミシヤグジ様を睨んだだけで氣絶させたら驚くだろう。実際は能力を使つたが。

また鉄の輪を消すときに込められている神力に適応したらしく神力を使えるようになつた。

「今度はこちらから行くぞ！」

風を操り透明の弾丸を大量に作る。その弾丸を圧縮し鋭く、小さくしていく。そして一気に放つ。

諏訪子はそれを回避するが少しずつ、確実に被弾していく。結果的に大きなダメージを与えられた。

「さて、そろそろ決着をつけるか・・・」

右手にさつき適応して使えるようになつた神力を右手に集める。それを見た諏訪子も力を溜めるがいかんせん行動にするのが遅かつた。

「遅い！」

俺はためた神力を放つ。

「きやああああああああああああああ

轟音と悲鳴が響き渡つた

私は参拝客の中に妖怪が混じっていることを感じた。とりあえず追い払う程度に祟つてみたのだが、まったく動じる気がない。その妖怪は参拝し、神社を見て回つた。もしかしたらこちらに戦争を仕掛けこようとしている神の手下かもしれないで警戒しておくに越したことはないだろう。

そして人が誰も居なくなつたころその妖怪が口を開いた。

「そもそも祟るのをやめてくれないか？」

仕方ないので姿を現しながら妖怪に質問する

「妖怪がここに何のよつ？」

「ただの参拝だが？」

嘘。そんなはずはない。ただの参拝だつたら人が居なくなるまで祟られながら待つていいはずがない。

「だつたらなんできつとここで待つていたの？祟られながら」

妖怪は少し考えてからこつと言つた

「わかつたよ。もう少しで神と神の戦いがあるんだろう？それを見に来た」

私はその理由が気になつた。もしあちらの神の手下なら戦いの最中に乱入してくるかもしれない。

「どうして？」

「神の本氣の力を見てみたくてね」

変わつた妖怪だ。普通の妖怪だつたら人間を助ける神の戦いなど見

向きもしないはずなのだ。

「変な妖怪だね。私の名前は洩矢 謙訪子、あんたの名前は？」
危険で有名な妖怪なら名前でわかるので自己紹介をして名前を聞き出そうと試みた。

「俺の名前は異界 塵だ」

私はその名前を聞いて驚いてしまった。私も噂でしか聞いたことはないが、過去に大きな事件を起こして封印されたと言う妖怪だ。
そんな妖怪をほおっては置けない。誰が封印を解除したかは知らないがもう一度彼には眠つてもらうしかない。

「異界 塘・・・！あんたさつき神の本氣を見たいって言つてたよね？」

「ん？ああ言つたが？」

「なら見せてあげるよ。神の本氣！」

私は両手に神力を集め鉄の輪を投げた。いま最先端の鉄武器だ。

「くつー！」

「よしー！」

これで倒せなくとも大きなダメージを与えられたはず・・・だったのだが

「おいおい、不意打ちはないんじやないか？」

彼は何もなかつたように立つており、その手には鉄の輪が握られていた。

「神力を込めた鉄の輪を手で捕つた！？」

「生憎だが俺はお前が思つてゐる以上に強いらしい」

「でもどうやって！」

馬鹿な、同じ神力を使える神ならともかく妖怪風情がこんなまで
きるはずもない

「込められてゐる神力は俺の妖力で相殺した。そうすれば飛んでく
るのはただの鉄の塊。捕ることはたやすい」
そんなことを成し遂げるとは・・・やはりただの妖怪ではないと言
う」とか。

「くっ、でもまだまだ！ 行くよー！」

私は鉄の輪を大量に投げる。もちろん神力を込めて。

「まだ甘い・・・甘いぞ！」

彼がそいいながら手をかざすと鉄の輪は次々に消えてしまつた。
しかしそのときわずかな隙ができた。

その隙にミシャグジたちに彼を祟るよつて合図をした。

「横槍をつ、入れるなあ！」

彼がミシャグジたちをにらめつけただけでミシャグジたちは氣絶し
てしまつた。

「なつー！」

こんなことができる妖怪が居るなんて！ 神力も、ミシャグジも鉄の
輪もまったく効かないなんて思いもしなかつた。

「今度はこちから行くぞー！」

そういうと彼の周りに風が集まっていくのがわかった。するとその風が弾丸になりこちらに飛んできたのだ。

私は避けようするが飛んでくるのは透明な弾丸。すべてはよけることはできず大きなダメージを負ってしまった。

「さて、そろそろ決着をつけるか・・・」

そういうと彼の右手に神力がたまつていくのがわかった。私もどうさにためるが遅かったようだ。

「遅い!」

彼の右手から力が放出される。

「あやああああああああああああああ

その悲鳴とともに私は意識を手放した。

第?話 ～洩矢の神～（後書き）

第?話どうだったでしょ？

感想・アドバイス・意見・注意点などありましたら送つていただけ
ると幸いです。

ちなみにこの小説は一話2500文字から3500文字の間になる
ようめざしています。

お知らせとお詫び

お知らせとお詫び

お知らせ

筆「どうも作者の筆箇です。今回はお知らせがありまして書かせていただいています」

塵「どうした? こんな急に改まって」

筆「皆様もわかつていただけてると思いますが最後に投稿できたのは2010年9月1日です」

塵「そうだな。そう思つんだつたら次話投稿したらどうなんだ?」

筆「僕もどんどん投稿していきたいのですが今、学校がとても忙しい状況になつております」

塵「つまり忙しくて投稿できないと?」

筆「夏休み明けテスト、部活の大会など忙しさが異常です」

塵「だから報告したい」と?」

筆「なので今後も投稿は難しいかもしません」

塵「学校の用事なら仕方ないか」

筆「なのでそちらが落ち着きましたら連載をしていきたいと思います」

塵「何時くらいに終わるんだ?」

筆「たぶん9月23日べりー」

塵「三.四日」

筆「なのでこの場を持つてこの小説を楽しみにしていただいている方々に深くお詫びを申し上げます」

塵「……いるのか？楽しみにしてくれてこいる読者なんて」

筆「……いる、と信じたい」

塵「居るところ・・・」

筆「そうね、この忙しい中気分転換に書いた次話をこの後すぐご投稿したいと思いまーす」

塵「そつか」

筆・塵「誠に申し訳ござりません」

第話 ～神VS神と妖怪～（前書き）

前のページにも書いたとおり忙しい中書いたためクオリティが…。
orz

まあ元から僕の小説はクオリティが低いんですけどね

第語話 ～神VS神と妖怪～

s i d e 謐訪子

「ん・・・ここは神社の中?」

確かに私はあの妖怪と戦つて・・・そつか、負けちゃったんだ・・・結局あいつの目的は何だったのだろつか?例の神の手下なら私が気絶しているときに私を殺したはずだ。

「お、起きたか。」

「これはあなたが?」

「いや、俺じゃない。感謝するなら東風谷の巫女に感謝するんだな」

「そつか、あの子が・・・」

東風谷の巫女はうちの神社の巫女である。

「ねえ塵・・・あなたの目的は?」

彼が溜息をついてからこいつ答えた。

「だから神の力が見たい。それだけだ」
本当に不思議なやつだ。

「なんで神の力を見たがるの?」

「なんで・・・ねえ・・・何でだらうな

「答えになつてないじゃん」
と私が笑う

「それはさておき」これからは交渉なのだが俺を少しのあいだ泊めてくれないか？」

「・・・しかたないね、いいよ」

結局あいつのことは何もわかつていない。何をして封印されたのか？なぜ神の力を見たがるのか？

それを見定めるチャンスかもしれない。

「せうか。ありがたい。それと東風谷の巫女のところに行つてやれ。す』く心配してたぞ？」

「わかった。いつてくるね。それと」

「それと？」

「短い間だけよろしくね

「ああ。よろしく」

side out

side 塵

俺がここに泊めてもらつてから数日がたつた。今日は何時にもまして諏訪子がピリピリしている。

そう、大和の神が攻めてくるのは今日なのだ。ソースは俺の能力。

そしてちょうど太陽が一番高いところに昇った頃のときにはやつてきた。

「諏訪の神、出て來い」

「あんたね。」この信仰を奪おうとしてる神つてのはー。」

「私の名前は八坂 神奈子。大和の神だ」

「私は洩矢 諏訪子。いくよ！」

「ちょっと待つた。あそこに居るやつは誰だ？」

と指を俺の方に刺して尋ねてきた。

「俺か？俺はただの見学者だ。手出しあしないから気にせず戦ってくれ」

神奈子は少し不満そうな顔をしたがそのまま戦いを始めた。

戦いが始まった。まず諏訪子がミシャグジ様に指令を出す。しかし、「何の対策もしないでくると思つたか！」

ミシャグジ様の動きが止まる。神奈子の背負つている注連縄からミシャグジ様の嫌いな力を出していいようだ。

「くつ！ だつたら！」

諏訪子が鉄の輪を次々に投げる。それを神奈子が回避していく。

「次は私からいくぞ！」

すると神奈子がいつの間にかに持っていたオンバシラを投げつける。諏訪子がよける。しかしよけた先の地面からオンバシラが突き出し

てくる。それもかすりながらよけていく。

それから数時間が経つた。

二人、いや正確には一柱かな?の戦いはまだ続いている。互いにもうぼろぼろなはず。

なのになぜここまで戦えるか?それは至極単純にお互いの気持ちのぶつかり合いなのだ。

諏訪子は自分の信仰を守るために

神奈子は自分の勢力を拡大するために

そう、単純だからこそそこから出る力は大きい。

しかし、その力を持つてもボロが出てしまうものである。

そう、まさにその瞬間諏訪子は神奈子のオンバシラに吹き飛ばされてしまつたのだ。

「また負けたー！」

と悔しがる諏訪子

「神奈子、何故こここの信仰を奪つた？」

「私への信仰を拡大するため。それ以外に何か必要か？」

「そうか。なら一つ忠告しておく、こここの信仰がお前に向くことはないだろう。仮に向いたとしてもそれは表面上だけだと思え」

「人間は強い神につくものだ。妖怪よ、なぜそう思う？」

「一つ、こここの諏訪子への信仰はとても根強い。それを変えようといふのは難しい。二つ、神なら人の信じる心を悔らないこと。それが理由だ」

信仰すれば助けてもらえ、はむかえれば祟られる。それははむかうなどという考えがまったく生まれる必要のないといつても過言ではないだろう。

「・・・もしお前が元々諏訪の神を信仰していた人間ならどちらにつく？」

神奈子が少し考えてからそういった。

「お前には悪いが諏訪子側だらうな
意外な質問だが俺は即答する。

「やうか・・・ならお前にほいこを出で行つてもいい

「なら俺はそれを全力で抵抗させてもいい

「なら武力行使させてもう。長い間戦つた後だがまだ十分戦えるぞ！」

「なら表に出る」

俺と神奈子は向かい合つて居る。

「こつでもどひわ」

「すいぶんと余裕だねえ・・・行くよー」

神奈子が諏訪子と戦つたときのようにおンバシラを投げてくれる。

「風よー」

俺は手をかざし風を操る。そして飛んでくるオンバシラにあてる。するとオンバシラへの力の向きが変わり、そのまま神奈子のほうに飛んでいった。

「なつー！」

神奈子は驚きながらもそれを避ける。

「どうした？そんなもんか？お前の実力は」

「くつーまだまだ！」

オンバシラを沢山投げてくる。さらに神奈子自身も突撃してくる。

「お前には悪いがさつさと終わらせてもらひ」

オンバシラを回避しながら右手に神力をためていく。

「神力！？だつたら！」

神力をためるのを見た神奈子は自分も神力をためる。俺とパワー比べか面白い。

「「行くぞー」」

互いの神力がぶつかり合つ。だが残念だつたな。お前ら神は信仰を神力とするが俺は適応してえた能力として神力を使つていて。つまり神奈子の神力は有限。俺の神力は無限ということだ。そして有限であるということはいずれガス欠を起こすこと。有限と無限の力がぶつかり合つたら最終的にどうなるかわかるだろう。

俺の神力が神奈子の神力を飲み込んでいく。そしてそのまま神奈子を飲み込んでいった。

「お、あれを食らつて立つてられるか」

「悔しいけど私の負けだ」

「そりゃ、じゃあ」

「追い出すことはあきらめる」

「いや、俺は出て行く

「なぜー?」「

「俺は俺の目的を果たしたしお前らと戦うこともできた。だから出て行く。妖怪が神社にいるなんて邪魔くわくてしかたがないだろ?」

「じゃあなぜ私と戦つた?」

「諏訪子に聞いてみな。少しさわかるかもしれないな。それとお前らせっかく同じ勢力になつたんだからなくよくじゅよ

「むづくの?」

「ああ、まあお前らとならもう一度会えるだろ?。それじゃあ、また会える日まで・・・」

こつもどおつ風を使つて移動する。ビードルがねえ・・・

第話　～神と神と妖怪～（後書き）

感想、訂正などありましたらお手に取る願いします

第5回　～暇つぶしほっこりせいかく～（前編）

いつも、久しぶりです。筆筒です学校からの呪縛から少し開放されたので、投稿したいと思います。
相変わらずクオリティは（高いですがよろしくお願いします。

第5話 ～暇つぶしは歩いてやつへへ～

side 麗

俺はある森の中に居た。今後の予定を立てているところだ。
次、東方の原作キャラに会えるとしたらおそらくかぐや姫こと「蓬萊山 輝夜」だろう。

となるとそれまでの長い時間をすこさなければいけない。どうしたものか・・・

・・・ん?

ふふふ、どうやら幸運というものは歩いてくるものらしい。
なに?何を言つてるか意味がわからない?そりやあそうだ。おれ自身にも「田」では見ていないのだから。

「大妖怪様が俺に何のようだ?」

俺は何もない空間にしゃべりかける。はたから見たらただの変な人
に見えただろう

「・・・」

当然言葉は返つてこない。いや、隠れて黙視しているといったほうが正しいか。

「・・・出てこないなら引きずり出すぞ」

今度は少し強めにしゃべりかかる。

「はあ・・・あなたにはかないませんわね」

すると空間にスキマができて中から人、いや妖怪が出てきた。

「俺に何のようだ」

「まあそんなに堅くならずに血口紹介と行きましょう。私の名前は八雲 紫よ」

「お前はもう知ってるだろ？が俺の名前は異界 塵だ。よく知らんが有名らしいなこの名前。少し前に神に召乗つただけで攻撃された俺は少し笑いながらあのときのこと思い出す

「それで俺に何の用だ？」
「これで三回目だ。

「あなたに手伝ってほしい」とがあるの

てつだつてほしいことねえ・・・まあ幻想郷関係のことだろ？。

そのとき体が何かを感じた。何かがないものを探すような動きだ。

「・・・言つておぐが俺には食欲といつものはないぞ？」
さしづめ紫が食欲あたりの境界を弄りつとしたのだろう。

「驚きね。私の能力が効かないなんて
ほらやつぱり。

「それで何を手伝つてほしいのだ？」
できるだけめんどくさいのはごめんだ

「あら、怒つてないの？」

「「」なんことで怒つてたら体が持たん。それともなんだ、落とし前

をつけてくれるのか?」

少し妖力を開放し笑つて聞く。ただし田でにうみながらだが
紫は少し間を置いてからそう答えた。なんだ遠慮しなくてもよかつ
たのに。

「手伝つてほしここととこうのは、私の夢の実現なの」

「・・・具体的には?」

おおまかのことはわかるのだが何をするのかがよくわからぬことち
やんとした返事ができない

「私の夢は人間と妖怪が共存する場所を作ることなの」

「それで?」

「それにはまず土地が必要なの」

「だからじつかの広い土地をもらひつか奪つて来い」と?
だとしたらとても面倒なのが・・・

「いえ、場所の田畠をつこていふのだけれどね・・・
なるほどぞやつこいつ」とか。

「場所は?」

「周りからは妖怪の山といわれてゐる山とその周辺よ
なん・・・だと・・・妖怪の山か。この世界に来たとき以来行つて
ないな。

「わかった。いいだらう」

久々に妖怪の山に行きたくなつたので快く引き受けた。鬼の皆様にも会えるだらうしね。

「あら、そんなに簡単に引き受けでいいの？」

「ぱつとみ悪そうなやつじゃないし、丁度あそこに用事があるからな」

「用事？何かしら？」

「里帰りってやつか？俺が生まれたところに行ひとおもつてなまあ正確にはこの世界に来た場所だがな」

「まあ善は急げ。行きましょうか」

あれ、もう行くの？別にいいんだけど早すぎる気が・・・まあいいか

「やうだな」

こうして俺は故郷（？）に行くことになつた。
これから起る激闘のことなども知らずに

私は悩んでいた。自分の夢、妖怪と人間が共存できる理想郷を作ること。

しかもそれには大きな土地が必要だ。それも普通じやないほどの大きさの土地が。

しかしその土地を確保するのは私には困難だ。だから私は助つ人を探すこととした。

そしてその男は今私の目の前に居る。そんなことを考えていると。

「大妖怪様が俺に何のようだ？」

彼が話しかけてきたのだ。おかしい。妖力は完全に隠している。そもそもスキマに隠れている私を見つけるなんて不可能なのだ。

彼の様子を見るためにそのまま黙視することにした。私が隠れていることがばれていないと賭けて。

「・・・出でこないなら引きずり出すぞ
やはり見つかっていたらしい。」
「はおとなしく出で行くのが得策か。

「はあ・・・あなたにはかないませんわね」

「俺に何のようだ」

「まあそんなに堅くならずには面白紹介と行きましょう?私の名前は
八雲 紫よ」

「お前はもう知ってるだろうが俺の名前は異界 塵だ。よく知らん
が有名らしいなこの名前。少し前に神に名乗つただけで攻撃された
神に攻撃されたことを笑つて話すなんて規格外ね・・・

「それで俺に何の用だ?」

「あなたに手伝ってほしい」とがあるの」
すぐに話すのもいいのだが頼みが頼みなので実力を図つておく必要
がある。

なので少しためさせてもらひことにした。

「・・・言つておくが俺には食欲といつものはないぞ？」

「驚きね。私の能力が効かないなんて」
まったく効かなかつた。これなら任せても大丈夫だらうか。

「それで何を手伝つてほしいのだ？」

「あら、怒つてないの？」
意外と友好的なようだ。

「こんなことで怒つてたら体が持たん。それともなんだ、落とし前
をつけってくれるのか？」

と彼が笑う。しかし目が笑つていない。

「・・・遠慮しておくわ」

「手伝つてほしいこととくのは、私の夢の実現なの」
決めた。彼に助つ人を頼むことにした。

「・・・具体的には？」

「私の夢は人間と妖怪が共存する場所を作ることなの」

「それで？」

「それにはまず土地が必要なの」

「だからじつかの広い土地をもらいつか奪つて来いと？」

「いえ、場所の田星をついているのだけれどね・・・」

「場所は？」

「周りからは妖怪の山といわれている山とその周辺よ」

「わかつた。いいだろう」

「あら、そんなに簡単に引き受けていいの？」

「芷川とお懸念のなやうじやないし、一度おやじに田事があるから

「用事? 何かしら?」

あんな鬼や天狗が大量に居るところに何のようがあるのだろうか？少し気になつたので聞いてみた。

「里帰りってやつか？俺が生まれたところに行こうとおもってな」

『新編　古今類聚　卷之三』

「そうだな」

そんなこんなで私たちは山に向かつた。新たな伝説が生まれること
も知らず

s i d e o u t

T o B e C o n t i n u e d . . .

第*s.i* × 話 ～暇つぶしが歩こうやつへべ～（後書き）

言いたいこと、感想、誤字脱字などありましたら書き込みお願いします。

第2話 ～妖怪の山～中腹～（前書き）

“いつも筆筒です。あれこんなときに誰か来た。

「よひ、筆者の筆筒」

「ひ・・・塵

「（うじやねえよーお前が作ったキャラだろ？ー」

それ自分で言ひて悲しくならなー？

「・・・そんなことはどうでもいいー・どうこう」とだよ。復帰した
んじや無いのか？なのに最終登校日が9月24日っておかしいだろ
おー」

「（ふかーーいわけがあるんだ！

「じゃあ言ひてみる。返答しだいでは・・・」

わかったー言ひからーこらむのをやめれ。理由とこのひのはだな・・・

夏休みあけた直後に忙しそぎて休止するつて言ひたよな？

「言ひたな」

それが終わって一安心・・・と思つたらだな・・・次の週に部活の
大会で練習厳しくモチベがあがらず書けなかつたんだ！しかも終わ
つたと思つたら中間テストのお知らせが届きました。

「なん・・・だとー?」

つまらぬとめると

忙しくて休止 再開 大会でモチベーション 中間テスト／(×○×)

/

今ここ

というわけだ・・・そして中間テストは今週の金曜日ーその次の日
は大会。

さらに来週の土曜日は学校行事が・・・学校は生徒殺すきか!

本当にすいません・・・

P・S 前置き長くてすいません。」

P・S2 台詞の後ろに名前があると台本読みでいるみたいといふ
意見が寄せられたためなくしました。

第2話 ～妖怪の山～魔～中腹～

s.i.d.e 麗

「・・・なあ紫よ。本当にこの山でいいのか？」

「ええ、いいよ　たぶん」

「たぶんって何だよ。たぶんってー。」

「知らないわよー。ここには何回か来たことがあるけどこれだけ探し回つて妖怪一匹見つからないなんて初めてよー。」
と、まあ紫と口喧嘩しています。理由？理由はだな・・・

「ほお・・・ここか。昔より大きくなってるな・・・」

「せつせつ鬼の王に会つて交渉しましょう!」

「あ、やっぱり鬼が支配してゐるのか。なら・・・」

「 なり？」

「歩いて行つて観光でもするかね。そのついでに鬼と戦つて王がど
「」にこるか聞き出す」

「まあ・・・たまにはいいわね」

というわけなのである。因みに歩いてから3、4時間経つてゐる。
のだが誰にも遭遇できない。どうしたものか・・・

それからまた半刻ほど歩いた。すると少し広い広場のよつなどり
に出た。

ん・・・殺氣とか妖氣とかを隠そうとしているやつらがこいつぱこ居る
が隠しきれて居ない。

鬼は不意打ちしたりとか卑怯なことを嫌うからこの配は鬼ではな
い・・・とすると天狗か？

「」に居るやつらがやつと相手をしてくれるやうだぞ？紫
わざと相手に聞こえるように話す

「やうみたいね」

ふふふつと胡散臭い笑い方をする紫。

その言葉と同時に大量の天狗が出てきた。ひい、ふう、みい・・・ええい！数えるのもめんどくさい！

「だが出てくるタイミングが悪かつたな。なかなかお前らに会えなかつたからいらいらしてんのだ」

「知らないわよ。私たちだつて鬼の宴会の準備で大変だつたのよ」
沢山居る天狗の中から一匹の天狗が出てきた。あれは・・・「射命丸文」だ。

「・・・まあいい。ここを通らせてもうつ。紫、危ないからスキマにでも隠れてろ」

「鴉天狗隊！行け！」

紫が隙間に隠れると同時に文が指令を出す。数で押せば勝てると思つていてるようだが甘いな。

「甘い！」

右手を地面に当て力をためる。そして・・・放つ！

side out

side 紫

私は驚くことしかできなかつた。
彼が手を地面につけてしばらくした後信じられないことがおきたのだ。

なんと広場一面に炎の海ができたのだ。それも森には燃え移らないよう調節してあるのだ。

さらにその炎がとても大きく、すぐに反応して逃げようとした天狗も多く巻き込まれた。

天狗は動きがすばやいためそうそう攻撃に当たらないのだが・・・。

そして一番驚くべきは発動モーションこそあつたものの、まったく妖力の類が見られなかつた。

普通、能力を発動するときや妖怪独特の攻撃をするときは妖力などが見られるのだが、彼からはまったく妖力が見れなかつたのだ。

どうやら彼は私が思つていたより規格外のようだ。鬼とはどう戦うのが楽しみね。

side out

side 文

私は油断していた。相手からは妖力がまったく見られなかつたからだ。

その上相手は一人、こちらは数え切れぬほど居る。数で圧倒できるはずだつた。

しかし、そんなことはなかつた。一瞬にして炎の海ができたのだ。

「！ ましい！ 引け！」

そんな私の掛け声も意味が無かつた。天狗たちはあつという間に炎に飲まれてしまったのだ。

「ぐつ！生存確認！動ける者は負傷者を連れ撤退！」
やむをえない。」」」は一時撤退することにする。はあ・・・上司に
なんていわれるか・・・

s i d e o u t

s i d e 霧

「おーい紫もういいぞ」

すると空間が裂け、紫がスキマから出でてきた。

「ほんと、あなたって規格外ね」

「仕方無いだろ？。長生きなのに加え能力があれだから」

「そういえば貴方の能力を聞いていなかつたわね・・・」
あれ？ そつだつけ？ すっかり忘れていた。

「俺の能力は『ありとあらゆるものに適応し能力として使う程度の
能力』だ」

改めて思うが俺の能力の名前って長いな。だつて25文字だぜ？
「チートもいいところね・・・。ってことは私の能力も使えるんでし
ょ？」

「そういえば少し前に適応したな。

「使えるぞ？ ほら」

スキマを開きながら囁く。

「ありとあらゆるもの」とは老いと死も無いのかしら？」

「老いは無いが死は自分の力を使って適応しないようにしてくる」

「あら、何故かしら？」

「さあね・・・気まぐれってやつだな」

本当の理由は人間である証を残しておきたかったからだ。一応自分は妖怪つてことで通しているので回りには伏せておく。

「ふうん・・・まあいいわ。いきましょ？」

「そうだ」「ちょーーーと待つたーーー！」「な

誰だよ。俺の台詞邪魔したやつ。ってあれは角か。一角に双角・・・

あ、某怪物狩のゲームのあいつ等じや無いからな？
片方は双角で とと の分胴をつけた鬼。「伊吹 萩香」だ。

もう片方は一角で体操服に半透明のスカートの鬼。「星熊 勇儀」だ。

「で、鬼さんが俺たちに何のようだ？」

「とぼけるんじゃなによー！」

と勇儀

「山に勝手に入った上に天狗を攻撃したこと後悔させてやるー」と萃香。いや、山にここまで進入させたお前らも悪いと思つぞ？

「で、どっちが戦うんだ？」

二人は当然といった顔で

「「私に決まつてゐるでしょー!」」

あー、見事にハモつた。予想通りつちやあ予想通りだが。

「あー、どうちかにしてくれよ。一人同時に相手にするのは面倒だからな」

「よしーならいいはじやんけんで決めよつ」と勇儀

と勇儀

「いいね!」

と萃香。あのー・・・リードじやんけんとか終わらないフラグじやあ・・・まあいか

「「じやーんけんぼー!あこーでしょーあこーでしょーあこーでしょー」」

数分後

「「あこーでしょーあこーでしょーあこーでしょー」」

おこお前ら何時まで続けるつもつだよ。

「だーーーーお前らじやんけん長すぎなんだよ!大体、両方グーしか出れなくなつてどうこうことだよー!」

「う・・・それもそعدだね・・・」

「わかった。」
から指點するぞー。それでいいな?」

「まあ・・・いいよ」

と勇儀

「もううん私だよなー!」

と萃(r y)

「じゃあそいつの一角が俺と、双角が紫と。それでいいな?」

「ちゅうど。私にも戦わせる気?」

「当然だろ。それに元々お前の用事だろ?
まさか全部俺に任せつもりだったのか?」

「仕方ないわね。いいわよ。来なさいー

そんなこんなで鬼の萃香と勇儀と戦うことになつた。それで・・・どうなることやら

t o b e c o n t i n u e d . . .

第?話 ～妖怪の山～～中腹～（後書き）

感想・意見などありましたらよろしくお願いします

これは2次創作です。原作の設定と多少あるかもしません。というかかなり そ
こらへんは大目に見てくれるとありがたいです

第八チ話 ～妖怪の山～に聞い～（前書き）

更新遅れてすいません・・・

忙しくてモチベがあがらずなかなか完成しなくて・・・

そしてまた更新は遅めになると思します

また3週間ほどあとに期末試験があるんです。

鬱だ・・・

7話で塵が双角の鬼と戦つといつ台詞がありましたが「一角」の間違えでした。なので訂正をせてもらいました。本当にすいません
o r n

第八チ話 ～妖怪の山～

妖怪の山の中腹で戦いが始まろうとしている。

「いつでもかかって来い」

「じゃあ・・・遠慮せずに行かせてもらひよー」

勇儀が殴りかかる。それを小さくかわす。それをしばらく続けていた。

勇儀の能力は怪力乱心を操る程度の能力だから力が計り知れない。

「どうしたんだい？ぜんぜん反撃しないじゃないか」

勇儀が攻撃を続けながらたずねてくる。

「ふん、だつたら一発でも当てるみる」

俺は挑発する。

「なかなか言つてくれるねえ・・・だつたらこれをよけてみな！」

少し下がつてから力をためながら歩きだす。そして三歩田を出した瞬間

「三 歩 必 殺！」

今までの攻撃より早く威力がある。よけないと察知した俺は防御を固める。

ドガアアアアアアアアン

山中に音が響いた。隣で戦っていた萃香と紫が戦いを中断させるまでの音

「な！馬鹿な！これを食らつたら萃香でも氣絶するんだよ！？」
勇儀が驚くのも無理は無い。絶対の自信を持っていた攻撃が防がれたのだ。

まあこちらも無傷な訳が無く左手が動かない。こりや折れたな。

「どうした？」から行くぞ

無事な右腕を使って殴る。左手で攻撃していた分の隙は足で対処する。

それを勇儀がかわす。やはり一筋縄ではいかないな。

「悪いが能力を使わせてもらひつ。風よ！」

この風は攻撃でも妨害でもなく自分に使う。つまり風の力で攻撃の速さをあげるとこりものだ。

「早い！」

勇儀がよけようとするが遅い！。なんたってこの速さは両手で両手を使っているときと同じペースで攻撃できるのだ

ヒットするが、
「くつーまだまだだよー」
こっちがラッシュする中無理やり攻撃を入れてきた。それが見事に

「残念。残像だ」

残像が残る速さで背後に回りこみ思いつきり攻撃を決める。

「なつ！ がはつ！」

勇儀は吹っ飛び木に激突する。

「どうしたこんなものか？ 鬼の四天王の力は！」

「まだまだ！」

勇儀が立ち上がり突撃してくる。早い。が、とうえられる！ 攻撃を受け流し流れに身を任せながら裏拳を入れる。

「うがつ！」

地面にたたきつける。

「はあ・・・はあ・・・まだだあああああ！」
さつきよりも早い。守りを固める。

大きな音が鳴り響く

ズサアアアアアアア

守りを固めたときの格好で数M飛ばされた。

ドサッ

その音とともに勇儀が倒れる。

「おつと、大丈夫か？」

近づいて肩をかし立てるが、

「ああ、すまない」

紫が戦っていたところと紫と萃香が意気投合して話をしていた

「いやー私たちの完敗だよ」と萃香

「ほんとだよ」と頃儀

「それ……さつき折れた腕、もう治つてゐるんだろ?」

「よくわかったな」
わからぬまま行動してたつもりなんだが

「私みたいに数多く戦つてるとわかるもなき
まあそうだな。」

「さて、鬼の王が居るといふを探すか

「やうね

「・・・これは私たちの一人ごとだけど
ん?

「母さんは今、山の8合田あたりに居たつ
ははん、なるほど教えてくれたのか。それに母さんってことは女か。
女の鬼の王って行つたら鬼子母神か。

「ありがとうな、勇儀、萃香」

これで探す手間が無くなつた

「勘違いするんじゃないよ? 一人」とだからな
そういうと勇儀と萃香は行つてしまつた

「行きましょ?」

「だな

つたぐぢ「じこづなるかな。さつきまで入つ子一人居無かつたの
に急に出てきやがつた

「なあ紫。飛んでかないか？」

妖怪を適当にあしらいながら囁つ

「貴方が歩いていくつていったんでしょう？」
胡散臭い笑いをしながらそり返してくる。因みに紫はスキマの中に
居る

「・・・あんなこと言わなければよかったです」

そんなことを行つてゐるうちに8合田付近まで着いた。

おお、居る。鬼の皆様が沢山居るよ。正直あそこに出るのは氣
が引ける

「ああ行くわよ？」

「あのね？紫さん？貴方はスキマにかく」「だれだっ！」鬼に見つ
かつた・・・しかもまた台詞をえがきられたし

「誰だと聞いているんだ！」

答えてもいにしきどじうじよつ。なんてことを考えていろ

「そいつ等は私の客人だ」

妖力がとても多く強そうなやつが出でてきた。

「しかしですね・・・」

「私の客人だといつてているのだ。さつととほかのやつらを違う場所
に移動させろ」

「・・・了解しました」

なんつー発言力。いやここのトップなんだろうけどさ。

おおー、早い早い。さすがトップ命令通りなこよしだ。

「……で、何のよしだ？」

「おこねこ、自分からサトを避難をかとこに向のよしだ?は無いだる」

「やう……かもなつ!」

『オヤヒコの面と共にきのす』にオーラがあふれ出す

「少しまずこかもな……紫一隠れてろ」

「ええ、氣をつけて」

「一人で私にかなうとでも?」

「伝説の妖怪も……なめられたものだな
自分で一つを言つのも変な感じだな……

「伝説の妖怪……フハハハ、面白い……ならばその伝説を打ち碎いてみせる!」

早速戦闘ですかそうですか。いや、いつなるのはわかつてたんだけどね?

さて、どう戦うか……そもそもあいては能力を「あぶねつ!」と考えてるところ攻撃してきやがった。

「じつした。闘いの中で考えすると死ぬぞ?」

「ええ、」咄嗟。行くぞ!」

相手の実力がわからないので様子を見ながら攻撃する。

「その程度か？本気を出してみろ」

殴り掛かった手をつかまれてそのまま後ろに投げられる。地面につく直前に風の力を働かせ受身を取り瞬時に立ち上がる

「お前こそ本気じゃないだろ？」

「さあな」

相手が一気に間合いをつめて攻撃してくる。それを手ではらう。すると足を刈つて転ばせようとするのを少し跳ねてかわす。

「いいのか？空中では動きが制限されるぞ？」

先ほどはらつた方の手を裏拳のようにして戻してきた。それが俺の体に当たる。が

「残像だつ！」

素早く背後に回りこむ。そして思いつきり打撃を打ち込む

「なつ！」

ドゴオオオオオオン

大きな音が当たり一面に響く

「フハハ。面白い。面白いぞ！なかなかの速さと打撃だ。しかしそんなもの私の能力の前では無力と化す！」

能力だと・・・あいつの言い方だと威力とか力の方向性とかに関係する能力か？

「どんな能力だろうと関係ないな」

風の力で一気に間合いをつめて攻撃する。つもりだったのだが

「てめえ・・・何をした?」

突き出そうとした腕が動かなくなつた

「なあに、能力を使つただけさ」

「さしづめ威力操る程度の能力つてとこるか?」

「ちょっと違う私の能力は『速度操る程度の能力』だ。速度があるのもならばすべての速度を操れる」
速度操る能力か・・・厄介だな

「厄介な能力だな。だが・・・相手が悪かつたな!」
もう一度距離をつめる

「無駄だっ!」

相手が能力を使う。が、

「どうかな?」

そのまま攻撃を仕掛ける

「バカなつ!」

「俺の能力は『ありとあらゆるものに適応し能力として使う程度の能力』だ」

「・・・やはりお前は面白い!面白いぞ!」
すると相手の姿が消える。いや、能力を使い速度を上げて通常では決して捉えることのできない速さで動いているのだろう。その証拠

として小さな音が「じりじり」うから聞こえる

「ふむ・・・どうしたものか・・・」

警戒しつつ対策を考える。能力を使ってもいいがそれでは面白くない

「考えあがると死ぬと忠告したはずだが?」

その声と共にいきなり前に現れ攻撃してくる。

それがあわててガードする。がすぐに背後から攻撃される。

「さすがだな・・・速度を操れても生半可な実力ではこんなことできまい」

その攻撃を紙一重でかわしながらそうつぶやく。

しかし、後ろからの攻撃をかわしても次は右から、その次は左とす

ごい勢いで移動と攻撃を繰り返してくる。

これでは反撃できない。避けるだけで精一杯だ。

「これだから闘いはやめられない!」

「・・・やっぱ鬼ってことか」

「お前の実力はこんなもんじゃあるまい!」

スピードをさらに上げ殴りかかる。

それを防御する。が、

「がつ!」

その刹那、背後からものすごい衝撃が襲う。その勢いのまま吹き飛ばされ木々をなぎ倒し数十メートルは吹き飛んだ。

早い。その一言に及ぶる攻撃だった初段の攻撃が当たったときまもうすでに背後に居たのだ。

いそいで立とうと体制を立て直すと

「どうした？まだまだいけるだろ？」「

そこには鬼神が立っていた

to be continued

第八チ話 ～妖怪の山～に聞い～（後書き）

訂正したほうが良い点、感想、誤字脱字などがありましたら書き込んでくれると筆者のモチベーションが上がりります

第?話 ～決着と山の謡～（前書き）

前回よりは早くうつ。

が、クオリティの低さはいつも通り。せりこほのかの話に比べて短いと言つおまけ付です。それでもよろしければぜひ一

題名に?とありますガチルノはまったく関係ありません

第2話 ～決着と山の謎～

「もう終わりか？」

鬼神が尋ねる

「まさかと思うが……これが本氣とは言わないだろ？」「

俺が尋ねる

「本氣なわけが無いだろ？」「

鬼神が答える

「よかつた。こんなのが本氣だったらがっかりするとひどだつた」

「この状況でよく言うわー！」

「それは……どうかな？リミッター解除レベル1……いくぞ」「自分のリミッターを一つ解除する。そして一気に立ち上がり間合いをつめる

「先ほどより数段レベルがあがつた！？」

よけれないと判断した鬼神は急いで防御をする。

だが……脆い。防御は完璧の力でなくてはならない。あせつて作ったものなど本来の防御に遠く及ばない。そこに漬け込む。

「無駄だ……」

拳がガードをつきぬけ相手が吹き飛ぶ

「がはつー！」

「どうした？まだこられるんだろう？」

「あたりまえだっ！」

相手が速度を操り先ほどと同じ攻撃をしてきた
右・・・左・・・前・・・右・・・後ろ・・・さまざまな方向から
攻撃される。

そしてさつさと同じように高速の2連打を放していく。が

「もう何度も同じ手にはかかるん！」

相手が攻撃するよりも早く攻撃を仕掛ける。

「なっ！」

ドガアアアアアアン

「チツ、タフなやつだ。」

その一撃を食らっても倒れない。

「私もそつ簡単にやられるわけにもいかないんでな

「このままでは埒が明かん。・・・お互い次の1撃で最後にじょう
じやないか」

「・・・わかった。いいださう」

お互いは少し離れ力をためる。そして

「行へー。つまつまちがう。」

俺が走り近づく

相手も走る

そして拳と拳がぶつかり合ひつ！

その音は山全体に響いた。

その勢いで砂煙が一面に上がる。

その様子を見ていた紫は急いでスキマから飛び出た。

しばらくしてから砂煙が徐々に晴れ、2つの影ができる。それを見た紫は

「貴方はよくがんばったと思つわ・・・」

アサッ。2つの影のひし - 一つが倒れる

「伝説の妖怪相手にここまで戦ったのですもの」

結果、最後のぶつかり合いは俺が勝った。そして俺が戦いに来た理由を知っている鬼神は俺たちの要求を受け入れた。

その要求は「この山とその周辺の土地の権利をもらひ」と。ただし鬼たちはこの山に残ること」という内容だった。

この要求は紫が決めたものだ。

鬼を追い出さないのは幻想郷ができてからの妖怪と人間のバランスをとるためだろう

最初は鬼たちが頭の負けた者が管理する土地にどどまるなんて恥だ！なんて言っていたが

「いつもどおりこの山で暮らしてればそのうちいろいろなところか

ら強い妖怪や人間がくるんだぞ？」

と、吹き込んだところ、俄然態度を変えて残ると言ひ出した。
さすが鬼だな、まじぱねえ。

「ありがとう。塵、助かつたわ」

すべての契約を終えた後、紫がそつと戻ってきた

「氣にするな。俺もこいつがあつて来たのだからそのついでだ」

「そついえば氣になつていたのだけど、その用つて何かしら？」
これは教えていいことなのだろうか？一瞬そつ考えたが紫のことだから何を言つても無駄だろう。

「おい、鬼神。居るんだろう？」

「居るぞ？」

そつこいつと木の陰から出てきた

「！」最近・・・いや数百年単位で昔に洞窟が一つ、勝手にできた
だらう？」「

「ああ、あれは今から36万・・・いや1万4千年前だったぐほお
！」

まじめに話せなかつたので殴つてやつた。といつかそのネタどこで
知つた？

「まじめに話せ」

「少しふざけただけじゃないか」

「まう・・・もう一発くらいたいか。そうかそうか」
「こいつのは好きじゃないんだがこれも話させるため。力をためて
脅す。

「ホウントウースイマセンデシタチャントハナシマス。たしか洞窟
ができたのは数十年前だ」

「で、その洞窟に入ったのは？」

「中を確認るために送った天狗の小隊とその天狗を探しに言った部下の天狗たちだ」

「といつことは両方戻つてきてないんだろ？」

「もうかなり昔のことだがな・・・戻つてきてないんだ」

やはりそつか・・・その洞窟は元居た世界。つまり未来からこちらの世界・・・過去と呼ばつか。過去に来たときに使つた洞窟だろ。では過去からこの洞窟に入つたらどうなるだろ? 未来 過去なら当然、過去、未来となるだろ。

しかもどの時代に飛ばされるかわからぬ。少なくとも未来ということは確定だが。

「まさかその洞窟に行くといふんじゃないでしょうね?」

紫が睨みながら俺に言ひ

「・・・さあな。鬼神。とりあえずその洞窟まで連れて行け」とすると鬼神は紫を見ながら

「はいはい・・・えりせ断つても自分で探すんだろ?」ひだりひだり

「いて來い」

「待ちなさい・・・異界 塵。」ここから先には通さないわ

「何故?」

俺がわからきつたことを聞く。

「さつきまで仲間だった人がわざわざ死にに行へよつなことを止め
ない理由があるかしら?」

「そつか・・・でもお前ならわかるだろ?お前じや俺を止めるこ
とはできな」

「せうかじらへやつてみないとわからないわ。そんなこと

「なり押し通るまで!」

「私は貴方を絶対に止める!行くわ!」

to be continued

第2話 ～決着と山の謎～（後書き）

どうだったでしょうか？

先頭描写って難しい・・・

最後は上シリアルにしようとしたのですがどう見てもシリアルもどきです本当に（ry

感想、訂正したほうがいいところ、などありましたらよろしくお願
いします。

え？ テスト勉強はどうしたのか？ ヤメテッ！

第一〇話　～弾幕、山に舞う～（前書き）

いつも、筆筒です

ヒヤツハリー期末テスト終わつたぜえええ！

といつわけで更新しました。

又テストが終わつたので更新ペースを早くできる・・・・かも

それではどうぞ

第一〇話 ～弾幕、山に舞う～

スウウ ヒュッ ドドドドドード

俺は今、紫と戦っている。それはなぜか？

俺は自分の目的の場所へ行くため。

紫はおれを危険な場所へ行かせないために。

俺の能力は「あつとあらゆるものに適応し能力として使う程度の能力」で、
その名のとおり俺に干渉するありとあらゆるものに適応し能力の一部とすることができるというチート能力だ。

しかし、この能力には弱点がある。この能力が働くのは何かが俺に干渉したとき、逆に言えば俺自身に干渉しなければ発動しないのだ。東方キャラの能力でたとえるなら永琳の「あらゆる薬を作る程度の能力」や諏訪子の「坤を創造する程度の能力」などの何かをつくる、又は自分の能力を上げるなどの能力には発動しないということだ。紫の「境界操る程度の能力」も、俺に関係する境界なら適応できるが、俺に関係しない境界を操ったときは適応できないのだ。

つまりどうこうとかと言つと、俺が紫に殴りかかってもスキマをひらかれてしまえばそれでおしまいなのだ。

「どうしたものか・・・」

俺が考えている間にも紫は攻撃をしてくる。因みに紫は後に「弾幕」といわれるもので攻撃を仕掛けてきている。この時代でもうすでに弾幕つてあつたんだね。

「どうしたの？もしかして鬼神との戦いで力を使い果たしたの？そんなんだったら私を倒すことなんてできないわ！」

言つてくれるじゃねえか・・・決めた・・・その弾幕戦受け立つ！

「はああ！」

元素を操り火、水、風の弾幕を作る。それを操り攻撃する。しかし、その弾幕は紫の手によつてつくられたスキマに吸い込まれていってしまう

「それだけじゃなくつてこんなこともできるのよ？」

紫がそうこうと俺の後ろでスキマが開き先ほど吸い込まれた弾幕が飛び出してくる。

「チツ、めんどくさい」

速度を上げそれをよける。

「なら・・・これならどうだ！」

さあやまなといひ弾幕をつくる。それを一斉に紫にめがけて飛ばす。

「いくの程度の攻撃なんて」

紫は自分がつくりたスキマに隠れ回避する。

「「」「いつ闘いにおいては使えるんだな。その能力」

「あら？ 貴方以外にならこいついう闘い以外にも使えるのよ？」
まあ、そりやあそーか。接近戦でも境界を操って相手を動けなくすれば一方的に攻撃できるしな。改めてチート能力だと思つ。俺も人（妖）のことは言えないが

「さあ・・・どうしたものか・・・」

手が無くもないのだがそれはかなり危険なのだ。まあ俺に危険なんてあつてないよつなものだが。

「どんどん行くわよ！」

「くつ！」

しだいに早くなつていく弾幕。それを避け続ける。「のままではまずい

「悪いけどこのまま勝たせてもらひわ」

紫が力をためる。さつと大技を使つてぐるのだらう。

そしてためた力を紫が放つ。すると縦に並んだ小さな弾幕を時計回りに放つてきた。

おかしい。力を溜めておいてこんな簡単な弾幕なはずが無い。

そう思いながら弾幕を避けていると紫が今放つている弾幕に加え縦に並んだ中くらいの弾幕を反時計回りに放つ。

「…まさかこの弾幕は原作で言つ『結界』『生と死の境界』か！？」

だとしたら早く止めないと面倒になる！
仕方ない、先ほど考えた作戦を実行するしかない！

俺は少し紫に近づきやつせのよつに弾幕を放つ。すると紫は弾幕を放ちながらスキマで移動しようとする。

チャンスは一瞬。ばれたら次は使えない作戦だ。確実に決める。
俺はスキマで移動しようとする紫に一気に近づく。丁度スキマに入つた紫は急いでスキマを開じようとする。が、この距離なら間に合う。

スキマが閉じる前にあつたけの弾幕をスキマの中に叩き込む。
そうすると紫がすぐに出口のスキマを開き俺の放った弾幕と共に出てくる。そのときに紫は先ほどの弾幕に加え大きめの赤い弾幕を時計回りに放つ。

俺は風の力を使い紫の弾幕と俺の弾幕が混じって密度の高くなつた弾幕を縫つように避けながら紫に近づく。弾幕のおかげで紫からは俺が見えないはず。

そのまま弾幕を抜けて紫の目の前に現れる。

「捉えた」

「なつ！」

再び俺はあつたけの弾幕を再び放つ。

ズドドドドオオオオオオオオオオオオオン

紫は俺が放った弾幕に命中し倒れていた

ふむ、それもそうか

「その洞窟はおそらく『未来』につながっているだろ？」

「「未来！？」

鬼神と紫が同時にそういった

「ちょっとまじ。どうこうことだ。じゃあ昔に調査させた天狗は未来に居るとでもいうのか…」

「ああ、やうだらうな」

「ならなぜ帰つてこない！」

「それは…おそらくだが戻つてこれないのだろう。何らかの事故や事情でな」

未来へついた先が『幻と実体の境界』完成後の時代だつたら天狗という種族が故に幻想郷に引きずりこまれてるだらうが

「そもそも何で未来に通じてるつてわかるのよ」

紫の厳しい一言。だが紫に一度通つてやつてきたなんていう訳にも行かない。

「俺の能力でわかる」

「ひいっておくのが一番だらう

「そつ・・・ならこれが最後の質問よ。なぜ貴方は未来に行くのかしら？」

「それは教えられないな。」

すまない。これだけはいえない。

「アハ・・・・」

「鬼神。洞窟へ案内してくれ」

「私にお前を止める権利は無い。・・・」

「どうしても行くのか?」

「ああ」

「なら・・・絶対に戻つて来い。」

「当然だ」

確かに俺が生まれたのは『未来』だ。でも今の俺にとつては『過去』
が自分の居るべき場所だ。

『未来』から『過去』に来る前に起こしてしまった過ちを正してま
た帰つてくるや。

「あいつに言つておいてくれ。『すまない』と

「・・・わかった」

誰とは言わなかつたが鬼神も納得してくれた。

必ず、未来での過ちを変え、この時代に戻つてくれると誓つて俺は洞窟を進んだ

第一〇話　～弾幕、山に舞う～（後書き）

久々に書くとあらためて難しく感じます。

話の流れは完結まで考えてあるけどそれを文にしていくとなるとまた勝手が違う・・・。どうしたものか・・・

感想、アドバイス、批判などありましたらいどしどし送ってください。

あと、描写が足りないので伝わりにくいですが鬼神は女です。

第一一話～今ヒラクワーマスター～（前書き）

いつも、簾笥です。いつもよりは早く投稿出来たかな？それでもほのかの筆者様に比べると遅いけど。

で、今回の話ですが前話のフラグなんてなかったように進みます。11話が塵の過去（未来）の話だとおもっていた方。申し訳ありません。

あつやめて石投げないでーえ？ 弾幕はもつとやめてー。

ピチューーン

「・・・えー、簾笥が被弾して消えたので変わりに言わせてもらひう」と話が一気に飛ぶ。簾笥いわく『こうしたほうが後々都合がいいから』だそうだ。『

簾笥＆塵「では第一一話どうぞー。」

第一一話 ～今とフリワーマスター～

妖怪の山で起きた事件から数千……いや1万年は過ぎただろうか？時代で言つて大体奈良時代の少し前、つまり竹取物語が始まる少し前だ

俺は今、妖怪退治屋のようなものをして暮らしている。まあ一種の暇つぶしだ。

退治といつても人に危害を加えなかつたりする妖怪は依頼を受けても見逃していたりする。

紫は自分の理想郷（幻想郷）をつくるために奮闘しているとか。紫とは今でもあつて理想郷のことなどの話をしている。最後になつたのはどれくらい前だつたか・・・。

因みに『未来』から帰ってきて1万年間の間何をしてきたかというと刀を作りひたすら修行していた。

かなりの量の刀があるのだが、今使つている2本を紹介する。

1本目が

名前：無双刀

能力：形を自由に変える程度の能力

説明：この刀は抜刀するときこめた力（妖力・靈力などすべての）の量や強さによって形 や切れ味などが変化する。

ただ、元々切れ味などが通常の刀より優れているため力を込めずに抜刀しても十分使える。

そして2本目

名前：夢想刀
むそうとう

能力：見えない程度の能力。

説明：この刀は鞘から抜かれた瞬間から鞘に収められるまでの間にこの刀を鞘から抜いた者にしか見えなくなる。

なので暗殺などにも使える。普通の刀に比べ少し短い

戦うときは右手に無双刀を、左手に夢想刀を持つ二刀流スタイルだ。また、作った刀をどうしても譲つてほしいと頼まれたので一本譲つたところ、

その刀は『楼観剣』と呼ばれてさまざま人の手に渡っているらしい。ナンテコツタイ、正体不明の妖怪つて俺だったのか。

と、まあ刀に関してはこんなものか。

「で、何のようだ？ 紫」

「あら、いつから気づいていたのかしら？」

「」の紙に夢想刀の説明を書き始めたあたりからだ

「最初から気づいてんじゃない」

「さいですか。」

因みに紫が来るときはいつもこんな感じのやり取りで始まる

「それはそうと今日」を教えてもらひわよ

「やつぱつその」とか・・・

「あの時『未来』へ行つて何があつたか話してもいいわー！」

「だからその話は時が来たら話すといつてるだろ？」「まつたく・・・こつになつたら諦めてくれるのか

「こつもそれじゃない」

「それよりお前、理想郷のまつまつした。こんなにひど油を売つて居ていいのか？」

「もうやつてこつも話しきはぐらかす」

殺氣を出してまで睨まなくともいいだろ？・・・

「・・・その殺氣と妖氣を消せ。そろそろ密が来る」

「それに向で貴方は妖怪なのに妖怪退治なんかしてるんだか・・・」

「・・・その話をここに呪るとおはするなと言つただろ？」「紫を睨む。ここに呪わせつけられたから。」

ドンドン

ドアをノックする音が聞こえる

「ハイ、今出ますよ」

ドアを開けて客を中に入れる。

「えーと、用件は？」

「その前にそこには居る方は？」

といつて紫を指差す。

「ちょっとした友人だから気にしないでくれ」

「そ、そうですか・・・用件は言つまでも無く妖怪のことなんですが・・・」

「その妖怪の特徴、主な活動場所、被害をわかる程度に

「特徴はわからないですが活動場所はここから近くの山の向日葵畠で被害は退治を行つた陰陽師が数名です・・・」

「ふむふむ・・・」

特徴がわからないから確實とはいえないがおそらく「風見幽香」だろ？。といつか向日葵畠を主な活動場所にする妖怪を知らないのだが。

「どうにかお願ひできないうじょうか？」

「わかった。引き受けよう

「ありがとうございますー」

「で、なんでお前がついてきてるんだ?」

山道を歩いているときに紫に尋ねる。

「あら? 悪いかしら」

「仕事の邪魔だ」

「別に一人増えた程度で邪魔にならないでしょ?」

「お前よつも強いやつが出てきたらどうするんだ?」

「やのとわは貴方に守つてもいいわ」

「あのなあ・・・」

この流れもいつもどおりの流れで結局俺が折れて紫がついてくる。

「つかしじままで歩いても木、木、木だな」

「向日葵畑まであと半刻はかかるわよ?」

「なんでわかるんだ?」

「計算したわ」

「マジっすか

「半刻あるつてわかつたらめんどくせくなつてきた」

「能力使えばいいじゃない」

「戦う前に余計な力を使いたくない」

本当は風の力を使うと後で放電しなきやいけなくなるから嫌なだけだが。

「じゃあ歩いていくしかないわね」

「仕方ない。走るか」

「やつ。勝手にすればいいじゃ・・・走ったほうが疲れないかしら?」

そんな言葉が聞こえたような気がしたが悪いな。その言葉を言い終わるころにはたぶん目的地についてるだろ。

「本当に走つて行ったのかしら・・・」

紫が一人そうつぶやいた

とこつわけで向日葵畑に着いた。向日葵が咲いている以外何も無い。

「そここの貴方? ここには何の用かしら?」

後ろから話しかけられる

「ここには綺麗な向日葵畑があると噂を聞いてね。噂どおりでよかつた。それで貴方は?」

振り向かず向日葵を見たまま話かける。

「私? 私はこの向日葵畑を管理してゐるよ。綺麗と言つて貰えるとうれしいわ」

「そうか」

「でも気をつけ。ここには恐ろしい妖怪が居るから。」

「俺は大丈夫だ。貴方こそ大丈夫なのか? ここで向日葵を管理してゐるといつたが」

会話を続けていく

「私も大丈夫よ。そこの人の妖怪より強いし、その妖怪・・・」

「私だもの!」「お前だから」

ほぼ同時だった。その声を発したのも、攻撃のために動いたのも。

カンッ！

俺が抜いた無双刀と相手の持っている傘がぶつかり合つ。

「驚いたわ。私の一撃を止めるなんて」

「そいつはどうも」

シユツ カンッ カンカンカン

再び傘と刀がぶつかりあつ。

「さしそうめ貴方は私を退治しに来たのかしら？」

「なんだ。ここのあたりがあるんじゃないか」

「ええ。降りかかるってきた火の粉を払つただけよ。たいして強くな
かつたから面白くなかったけど」

「・・・なんだ」

刀をしまつ

「あら？ 降参でもするのかしら？」

「いや。お前を退治する理由が無くなつたからな

「ふーん・・・たいした自信だったみたいね。私を倒せること前提
じゃない。そして貴方は帰るつもりしている」

「ああ」

「でも・・・私は貴方を逃がさないわ。妖怪にもプライドはあるのよ?」

「できれば殺したくないんだがな」

「人間風情がよく言うわ」

「そうか・・・人間風情かどうかは戦つてみてから言いな。紫、いつもどおり手は出すなよ?」

「はいはいわかってるわよ」

いつの間にか待機していた。紫がそういう。

「あら。仲間が居たの?それも妖怪の」

「まあちょっとした友人だ」

「まあいいわ。行くわよ!」

そして再び刀と傘がぶつかりあい

to be continued

第一一話　～今とフリワーマスター～（後書き）

第一一話　～今とフリワーマスター～

次回：VSフリワーマスター！

感想・意見・批判などありましたらいただけるとうれしいです

第一二話 ソーラーフラワーマスター（前書き）

どうも、筆筒です。

少し前から気がついている人も多いかもしれません、小説に章を作らせてもらいました。・・・・これいのかなあ・・・

では第一二話 どうぞ

第一二話 ハーフマスター

「行くわよ

その掛け声と共に傘と刀がぶつかり・・・

「ちょっと待った

あつ前に俺が声をかけた

「ー? 何よ。こまやう怖氣付いたとでも言つの?」

「場所を移さないか? 俺たちがぶつかりあつたらおそらく辺り一面は無事じや済まないだろ? 俺もこの綺麗な向日葵を傷つけるのは心苦しい」

それにこじらお前も本氣が出せないだろ? と、心中で付け足す。

「私もこの子たちを傷つけるのは嫌よ。だから守りながら戦おうと思つていたのだけれども。・・・私を花の無い場所に連れ出すといふことは本気を出してもいいことじつことよね?」

やはり花を傷つけるのは嫌なようだ。・・・最後に強者が弱者をいじめるときのような笑みを漏らしていたのは触れないでおこう。

「それで場所だが・・・

「もつ少しの山を登つたところに一度いい場所があるわ。先に行つてるから必ず来なさいよ

そうこうと幽香は飛んで行つた。ん・・・? 飛ぶ・・・?

「塵? 移動をビリするの? まさかまた走るとか言つたじゃなしでし

「うね？」

「・・・やうか！飛べばいいのか！」

俺は何を忘れていたんだろうか？こんな簡単なことじやないか。

「へ？」

紫が「何よそれ？」と叫こたげな顔で「ひりを見ていこる。

「こや、飛べるつひ」と自分でも忘れてた。先に行つてゐから来るなり来こよ」

そう言つて俺はいじを後にした。

「またおいてかれたわ・・・」

紫がそう呟いたのも聞かずに・・・。

うでもいい。

「 さあな・・・行くぞ」

シユツ、カン、カン、キン

先ほどのように刀と傘がぶつかり合い音を立てる

「 まつたく、刀とぶつかり合つてもなんとも無い傘つてビリよ?」

「 当たり前じやない。世界で唯一枯れない花なのよ
その台詞どつかで聞いたことが・・・まあいいか。しかしこのまま
ぶつかり合つても埒が明かないのは田に見えてる。」

「 鬪いの最中に考えてると隙を生むわよ?」

「 気がつくと幽香がすぐそこまで来ていた。」

「 しまつ」

ドゴオオオオオオオオオン

幽香のスピードが予想以上の速さだつた。まつたく・・・悪い癖だ
な。闘いの最中に考えすぎるのには直せなければ

「 あら? まだ生きているのかしら。やっぱり普通の人間とは違う見
たいね。でもそうでなくちゃ面白くない!」

「くつ、こんなのでくたばつてたら退治屋つとまんねーの」

「貴方の力を見せて頂戴？私が楽しめるよ！」

再び幽香が接近してくる。が、一度見た速さなので 反応し避ける。幽香はそのまま連撃を繰り出す。それを紙一重で避けていく。

「ちょこまかと……！」

先ほどまで傘での攻撃はなき払いだつたのだがいきなり突きをしてきた

「ハアアアツ！」

傘の先にエネルギーがたまつていく。・・・まさか元祖マスタースパークか！？まずいつ

「くつ！」

勢いをつけて納刀しながら後ろに下がる。

「吹き飛べっ！」

超極太のマスタースパークが飛んでくる。

「こんなもん零距離で打たれて回避できるかつ！」

避けれないならどうすればいいか？そんなの簡単さ。防げばいい！

「ハアアアア！」

無双刀に力を注ぐ。そしてマスタースパークが目の前に来たところで抜刀しそのままそのマスタースパークを切る。

するとマスタースパークはそのまま一つに分かれて後ろへと飛んで行った。この間約5秒

「なつ！」

幽香が少しあわてている。

「さすがに危なかつたぜ」

あんなもんまともに受けたらなんて考えると身震いする。

「ふふ・・・フフフ・・・」

「あ、あれ？ 大丈夫か？」

いきなり笑い出されるとこいつちが怖くなる。

「いいわ・・・徹底的につぶしてあげる・・・ふふふ・・・

あれー？ なんかやばいことになつてるような・・・？」

「できれば降参してほしかったんだけどなあ・・・」

「降参？ するわけ無いじゃない。こんな楽しいのに？ ふふふ・・・
行くわ」

「つ！」

さつきより数段階早い。だが追いつけない速さでは無い！

幽香は傘で攻撃する以外に蹴りなどの体術も使ってくるようになった

幽香の傘を夢想刀で受け止め、その勢いのまま無双刀でカウンターを仕掛ける。

幽香が後ろに下がりそれをかわす。そして傘先からマスタースパークとは違った妖力弾を放つ。

ジャンプでを回避しながら背後に回り込み蹴り飛ばす。

「ぐつー・まだまだよー。」

傘の攻撃を無双刀で受け止めつばぜり合いになる。

「あああああああああ！」

本当にどうなつてんだよ。傘が刀で切れない硬さとか。

「チイツ、このままじゃ埒があかねえ。ラストに大きなぶつかりあ
いと行こうぜや」

「いいわ。この一撃勝負に負けたほうの負けね？後悔はしないわね・・・？」

「あの言葉、そつとつわのまお前に返せた」

「行くわ」

「來い」

互いに溜めていた力を一気に放つ。そしてぶつかり合い

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

その音はその一帯に響いたと言つ

side 紫

今回の闘いはいつもに比べて面白かったわ。
でも一つ気になることがあったのよね。なぜ塵は相手と同じ程度の
実力しか出さなかつたのかしら？

私は忘れていない。塵が鬼神と闘つたときに出した力を。
そう、あの時は自分の力の制御の一つを開放した。しかし今回は開
放しなかつた。相手の実力からしたら開放したほうがよかつた戦い
であるのは事実である。

彼は私の理想郷の夢の実現を手伝ってくれている。しかし私は彼の
ことを何も知らない。

私はもう少し彼を観察する必要があるようだ。

第一二話 ハーフワーマスター（後書き）

書いてからおもった。戦闘描写は第三者視点のほうがいいこと。
感想・意見・批判などありましたらいつもどおり募集しているので
どうぞお送りください。

第一参話 ハラワーマスター（前書き）

今回は戦いの後のちょっとした話なので短いです。
大体いつもの三分の一ぐらいかな？

それではどうぞ

第一参話 → フラワーマスターをめぐる

side 幽香

私は目を開ける。なぜ？寝ていたから。いや、違う。私は闘っていた。では寝ていた？そう、負けたのだ。最大出力の技を破られて。

それだったらなぜ私は私の家に居る？

そう考えながら意識を覚醒させ辺りを見回す。

居た。あの男だ

side out

side 霧

俺はあの戦いの後幽香を彼女の家に運んだ。因みに紫は仕事があるといつて帰ってしまった。
殺す気で戦っていない相手を倒してそのまま行くほど情なしではない。

そんなことを考えていると幽香が田を覚ました。

「ん？ 目が覚めたか。 気分はどうだ？」

「最低よ。 貴方に負けた上に助けられるなんてね」

「そりゃかい」

まあそう帰つてくるのは予想していたが。

「それに何勝手に家に上がりこんでるのよ」

「生きてるやつをほおつて置くわけにも行かないだろ？」

「・・・ただの人間の癖に」

「おつと。 ただの人間という認識は改めてもらわないと困る
まあ妖力は完全に隠していたからわかるはずも無いのだが。

「どうこう」と

「いひこひ」と

妖力を少し開放する。

「まさか妖怪だったなんてね。 ・・・なり」

「なら？」

「なぜ妖怪退治をしていて、私を見逃すつもつなのかしりへ・妖怪な
の」

「別にたいして悪い」としてるわけじゃないから。妖怪も小妖怪辺
りなら人間の都合だけで殺されちゃうこともある。すべての妖怪が
そうである必要はねえだろ?」
これが俺の考え方だ。

「ふーん・・・妖怪の妖怪退治屋ねえ・・・」

「妖怪退治屋っていうか、戦うことに關しての何でも屋って感じだ
な」

実際、強くなりたいとか陰陽師になりたいとか言って弟子入りを求
めてくるやつも少なくない。
が、すべて断つている。理由としては妖怪ってことがばれるためん
どくせいから。

まあただ門前払いってのも仕事にならんから多少の稽古をつけてた
りはする。

「まあいいわ。次ぎあつたときはこの仮を変えさせてもいいわよ
次あつたら戦うこと前提ですか。

「そりが、楽しみにしてるやつでは、いくとするかな
実は戦うことが嫌いなわけではないのだが。

幽香の家を出て人里に向けて飛んだとき村人に見つかりそうになつたのはまた別のお話。

第一参話～フランマスター～（後書き）

第一参話～フランマスター～（後書き）

うーん。やっぱ描[か]とかが苦手だから余話だけになるのを何とかしたいなあ・・・

そういうふとおもったんですが、この小説って人気あるのでしょうか？

別にあってもなくても不定期に書き続けるだけなのですがね。

感想・訂正・アドバイス・批判などありましたらこいつをどうぞお待ちしております

第一？話 ～藤原の娘～（前書き）

いつも筆筒です。最近鬱です。言いたいことはそれだけです。

因みにこの話は導入部といつことで短めです。

それでは第一？話 どうぞ～

第一？話 ～藤原の娘～

幽香との戦いから数年がたつた。

俺は不老なので体的な意味で成長しないので怪しまれないよう各
地を転々としている。

そして今は都に来ていて知名度のから再び仕事をしている。

はずだったのだが幽香に勝ったのが大きかったのか知らない間に有
名人になっていたらしくいろいろと忙しい。

なのでここにも長居はできないようだ。せっかくの都なのでしばら
くいるつもりだったんだが・・・

「つと、そろそろかな？」

俺は筆を動かすのをやめ、しまつ。

それと同時に玄関をノックする音が聞こえる。

「はーはー。今出ますよ」

玄関を開けるとそこには一人の男性と少女が立っていた。

「どうあえずあがつてください」

「ああ、すまない」

そんなやり取りをして家の中に入る

「それで用件は？」

「单刀直入に言つと娘を立派な陰陽師にしてほしい」つまり自分の娘を俺の弟子にしてほしこと

「何でまた陰陽師を？」

「何があるかわからないからこの子には強くなつてもらいたいのだ。」

「

「しかし彼女はまだ子供ですよ？」

「いくら強くなつてほしいからって子供になつてほしいといふのは無理があるだろ？」

「我が子だからこそ早くいつちに強くなつてもらいたいのだ！」

「本人はどうなんですか？」

「父上が強くなれと申すのなら私はやりますー！」

「先に言つておぐが俺の戦い方は刀がメインだ。陰陽道に関しては詳しくない。」

まあ刀をメインに妖力を使ってますなんて言えないわな

「それでもいい。娘が強くなつてくれるならな・・・」

「・・・とりあえず1日だけ預かる。話はそれからだ」「甘いな・・・俺も

「「一 お願ひします!」」

とこゝで1日彼女を預かりいろいろ調べた結果強さは弱の上だつた。これだけ聞くと弱そうに聞こえるがなかなかすう!」この基準は強の上が紫や鬼神あたり、強の下が幽香や鬼の四天王、中の上は一般の鬼、中の下は一般天狗、下の上は小妖怪といふ感じだ。

因みに普通の人間は修行して中の下、才能があれば中の強ぐらいまではいける。

しかし彼女はどう見ても子供でかつ女なことを考えれば弱の上はすうぎるぐらいだ。

「そりいえば名前はなんていうんだ?」

「私の名前は藤原 妹紅といいます」

な、なんだつてーー髪が黒だつたし原作の様にもんぺ履いてなかつたから気がつかなかつた。

まだ不老不死の薬を飲んでないから髪が白くないのはあたりまえだが。

「？　どうかしましたか？」

「い、いや、なんでもない。大丈夫だ。少し驚いただけだ」
しかし妹紅が居るということはもう少しで竹取物語が始まるのか？
ということはあと千年と数百年で原作が始まるのか？俺が話に関与してゐる時点では原作とは言いがたいが。

どうしたものか・・・本当は断つて帰つてもうおつと思つたんだがな。

しかしなぜ妹紅をそんなに強くしてほしいんだ？まさかほかに目的があるとか？

例えば望まれない子つていう設定だから早く自立させて自分からとうざけたいとか？

まったくもつてわからん。

仕方ない。今回の依頼を受けよつ。もし断つたら幻想郷ができるまでえないかも知れないしな。

次の日、世間の人から驚かれたのは言つまでもないだろう。

そして俺が始めて幼児愛好者と呼ばれたのはまた別のお話

第一？話 ～藤原の娘～（後書き）

「どうでしたでしょうか？前話と同じく短いですが。

そうそう。今やつも某市場で紅魔郷と妖々夢、永夜抄を注文しました。

塵「あれ？お前原作全部やつてなかつたのか？」

風しかやつたことありませんでした。ちなみに実力はノーマルで文に勝てない程度です。めっちゃ下手です。パターン化？なにそれおいしいの？

塵「おまえよくそれで小説書く気になつたな」

書きたくなつたものは仕方ない。

ああ、そうそう。次の話からはいつもどおり2500文字前後で書いていきます。

塵・筆「「それでは次話をお楽しみにー」」

感想・訂正・アドバイス・批判などありましたらいつもどおりお待ちしております

第一語話～授業と竹取の線と初めての妖怪～（前書き）

いつも筆筒です。東方やつてたら更新遅くなってしましました。
で、どこまで進んだかといふと

紅と妖はイージーでも撃沈。夜はイージーこそノーコン余裕だけど
ノーマルはうどんげに会つのが精一杯という情けない状況。なんだ
け俺STG下手なんだよorz

まあそんなたわごとはおいておいて、小説のほうを突っ込むといつ
もながら展開が速いなあと自分でも突っ込んでみたり。

そんな感じですがそれでも読んでくれる方は
第一語話、どうぞ！

第一話　～授業と竹取の翁と初めての妖怪～

「これが靈力だ」

自分の靈力に色をつけて見せる。

「先生！靈力って誰にでもあるんですか？」

元気よく手を上げ俺に質問する妹紅

「いい質問だな。靈力ってのは基本的に誰にでもある。因みに妖怪が使う力は妖力という」

俺が基本的なことを教え、それに対しても気になつたことを妹紅が質問し、それに答えるという感じで教えている。

「先生、靈力つてあると何ができるんですか？」

「んー・・・そうだな簡単にいうと妖怪と戦ったりすることができる。札に靈力を込めて攻撃したり結界を張つて護つたりするのに使うことが多いな」

まあ俺が使うのはもっぱら妖力なんだが。

「ん？妹紅、ちょっと待つてろ」

「あ、はい！」

そう返事をした妹紅を庭で待たせて、家の中に入る。

「まったく、何のようだ？」紫

すると何も無い空間が裂けてそこから紫が出てくる。

「貴方が珍しく弟子をとったときいてね。ちょっと見てみたいと思つたのよ」

「来るのは勝手だがスキマで来るのはやめや。もし見られたらいどつする?」

「次からは氣をつけろわ」

まあこいつ言つても次来る時は忘れてるんだが

「まあおれは戻るぞ」

妹紅を長く待たせるのもいけないので庭に戻る

「すまん、待たせたな」

「あの、そちらの方は?」

「私? 私は紫よ。塵の友人ね」

「よひしへお願ひしますー」

「ええ、よひしへ」

「と、まあ紫が見学する」とこなつたが特に氣にすむことは無い
別に見られて困るような内容の授業じゃないし

「えーと、どこのまで教えたかな? ああ、靈力のことか。そう、靈力

を使えばこんなこともできるんだ

靈力の玉を作る。それをあらかじめ立てておいた木の枝に投げる。すると木の枝が空を舞つた。

「す・・・すゞ」「ですね」

「おいおい、他人事じや困るんだ。お前にもこれができるようになつてもらわなといけないんだから」
それにこれはまだ簡単なほうだしな。

「ハイ！」

と、まあこんな感じで授業が続いた

「妹紅、おまえはさびしくないのか？」

「少しがびしいですけど父上が言うならそれに従います」

妹紅の父親、藤原不比等は妹紅を俺のところにおくよしに言った。
俺にはどうもこの行動は妹紅を自分から遠ざけているよしひしか思
えない。

しかし遠ざける理由がわからない。ただ単に存在を隠したいならもつと良い方法がほかにあつただろう。

仮に俺の指導で妹紅が有名な陰陽師になつたとしたら隠すビリの
騒ぎではなくなる。

本当に訳がわからない。

「？ どうかしました？」

「ん、いやなんでもない。それよりももつ寝る時間だぞ。寝た寝た」

「はい。お休みなさい」

それから数分後、妹紅が寝たのを確認した後起きる。

俺は能力ゆえに寝ることができないので、（正確には能力を解除して練ることはできるが数億年位寝てないので数年間は寝てしまうだろ（ひ）妹紅に人間ではないことをばれないために寝たふりをしている。

といつても修行するしかする事が無いので庭で刀の手入れと修行をすることにした。

それから数年たち妹紅も成長しそうらへんの陰陽師や妖怪退治屋顔負けの強さになった。

「で、依頼といつのは？」

「実は・・・ワシの娘が月から月の使者が来て月に帰らねばならな
いといつのじや」

「それで？」

まあ何がいいたいか分かるが

「護衛を頼みたいのじや」

「日時は？」

「次の満月の夜じや」

とまあ上の会話から分かるが竹取物語で言つ竹取の翁と依頼の話を
している。

この数年間で起じたことをまとめると。

竹取の翁が輝夜を竹林で見つけ、その美しさに多くの人が求愛し、その中で5人が5つの難題と呼ばれる問題を受けるが全員失敗し恥をかいた。その中には妹紅の父、藤原不比等も居る。そして帝もその話を聞き求愛したが断られる。

と、ここまでは竹取物語どおり進んでいた。

この話が進んでいくにつれ藤原不比等が妹紅から離れて行き、（それまではなんだかんだで修行風景を見ていた）

妹紅がそれに不満を持つようになり少しずつ輝夜を恨み始めた。

そして輝夜が月に帰らねばならないと言に出し竹取の翁が月に帰すまいといろいろなところの陰陽師やら妖怪退治屋やらに頼み込んでいる。

「ふむ、分かつた引き受けよう」

因みにこの会話は妹紅に聞かれないよう適当に走りこみの指示をして家から出て行つてもらつていて

「本当か！？では次の満月の夜、頼んだぞ！」

そういうと翁はすぐに家を出て行つてしまつた。おやぢく他のところも回つていくのだろう

「ただいま戻りました！」

翁とすれ違いで元気な声と共に妹紅が帰つてくる

「おひへ、お帰り」

「こまおじこさんが出て行つたようですがもしかして依頼ですか？」

「ああ、そうだ」

「やつた！」

「今回の依頼にお前は連れて行かんぞ？」

この依頼に妹紅を連れて行つたら大変なことにならうだ

「えー？ 何ですかー？」

「まあそういうな。お前はまだ若い。まだまだ長い時を生きるんだ。
依頼なんていいくらでも受けれるだらうっ！」

いろいろな意味で・・・な

「むー・・・分かりました」

しかし妹紅を最初に依頼に連れて行つたときは大変だった。
たしかあれは

「妹紅、妖怪退治に行くぞ」

「妖怪退治……ですか？」

「ああそうだ。ただ訓練をするだけでは強くなれないのだ。実践があつて強くなれるものだ」

「……はい！」

「うむ。いい返事だ。

「ただ気をつけろよ？相手は妖怪だ。油断してるとやられちまつで？」

「大丈夫ですよ。油断はしません」

妖怪を前にしたらそんなこともいえなくなりそうだがな。妹紅もまだ子供。恐怖に立ち向かうとなると考えなんてなくなつちまつからな

そんなかんだで歩く」と数十分。とある山に付いた。

「いいか？妖怪をおびき寄せるとときは殺氣を消して靈力を抑えるんだ。ただの通行人を装つためにな」

「はい・・・」うですか？」

「そうだ。じうじう歩いて居れば・・・思つたより早く来たな」

こうして簡単におびき寄せられるやつはバカか力の弱いやつぐらいだ

「グルルルルル」

泣き声から人語を理解することはできないと判断。これを妹紅に任せたら・・・どうなるかな？

「妹紅。これは一種の試験だ。」いつに勝て

「え？ ちょっとまってください って危ない！」

妖怪が妹紅に向かって噛み付く。それをぎりぎりで避ける。

「ガルルルルル！」

一回で殺せなかつたことにイラついている様だ

「えつと、妖怪と戦うときは札を持って・・・靈力を込めて投げる！
シユツ シユツ シユツ と音を立て妹紅が投げた札が妖怪に当たる。が、

「ガグルルルルルッル！」

ひるむことも無く突進を仕掛けてくる。

「クッ！」

靈力の玉を投げながら回避する。投げた玉が妖怪に当たり、砂埃が舞い上がり視界がさえぎられる。

「グルガアアアアア」

妖怪の噛み付きに対処できず少し傷を負ってしまう

「なんで！」

札を投げる

「何で！ 何で！」

靈力の玉もさらいに投げる！

「なんでなんでなんで」

あー、こりやまずいな。止めないとパニックで大変なことになりそうだ。少し手荒だが・・・仕方ない。

妹紅の背後に回りこんで人が氣絶する程度の力で妹紅を殴り氣絶させる。

まあ今回は初めてだつたし妹紅もがんばつたほうだろう。

「グルルルル！」

「あーもつづるさいな。黙つてな！」

妹紅を背負いながら無双刀を取り出し妖怪を真つ二つに斬る。さすがに妹紅がおきてたらこんなことはできない。

「さて、妖怪退治も終わつたしかえるかねえ」

そういうつて俺は山を後にした

第一話　～授業と竹取の線～初めての妖怪～（後書き）

第一話、どうだったでしょうか？

この話を書いていたときふとおもつたんですが他の書を手せんと交流つてしたほうがいいんですかねえ？どうも自分のから声をかけるのは苦手で＾＾；

いつもどおり批判、感想、アドバイス、訂正したほうがいい点などありましたらお待ちしております

第一 si × 話 ～月人再び～（前書き）

いつも筆笥です。

今回はやつちまつた感が・・・

そんな感じです。

また今回はいつもより500文字ほど少ないです。

理由はそこで切らないと結構長くなってしまつからです

それでは第一 si × 話 どうぞ

第一 side 話 ～月人再び～

side 霧

時は満月の夜、舞台は竹取の翁の家。

普段は求婚者たちしか来ないこの家だが今日は違う。

兵、それも武装した兵達がこの家を囲んでいる。

そもそもそうであろう。今日はかぐや姫、つまり輝夜が月に帰らねばならない日である。

「ま、こんだけ居ても無駄なんだがな。原作の設定通りになつてくれるることを祈るだけだ」

因みに俺の配属場所は輝夜の部屋の前で難題に挑んだ5人や、有名な妖怪退治屋、陰陽師が集中しているところである。

「きたぞおおおおおおお！」

その声と共にあたりに緊張が走る。皆がいっせいに見上げると月の近くでなにやら光っているのが見える。

その光は徐々に大きく、いや、近づいてきている。

本当は月人の顔はもう見たくなかったんだけどね。まあ、永琳と輝夜は除いてだが。

side out

side 妹紅

師匠は付いて来るなといってたけどやっぱり我慢できない！

・・・気づかれければ大丈夫だよね？

とか思いながらこつそり師匠の後ろを付いて行く。

しかし今日は夜なのに入人が多いなあ。もしかしてこれ全員兵士！？
こんなに戦う人が同じところに集まるってことはよほど手ごわい妖
怪なのかな？

私が再び人影に戻つて師匠の後を付けること數十分

私は見覚えのあるお屋敷に着いた。

まさかあの女に関する依頼つてこと！？
だとしたら父上も居るかもしれない。

私は庭の茂みの影に忍び込んで見守ることにした。

side 麼

先ほど月から出てきた光は弓の射程範囲の少し前で止まった。するとその光はさらに強い光を放つた。

するとたちまち兵士たちは動けなくなってしまい。ついには武器をも落としてしまった。

俺は能力で防いだが非常事態が起きるまで動かないようにする。

すると光の中から人が出てきた。遠くてよく見えないがおそらく永琳だろう。

そのまま部屋の中へ入っていった。

俺は見逃さなかつた。永琳が部屋に入るときひそかに俺のほうを向いて合図を送つたのを。

まあられない様に部屋に来いといふことだらう。

靈力で自分の立っているところに分身を作り、風の力を使いばれな
いように部屋に移動する。

「永琳！私・・・」

「わかつています。姫様。月に帰りたくないのですね？」

「そうなの！」

「ふーん・・・で、永琳。なぜ俺を呼んだ。

風の力で部屋に入ると輝夜と永琳が話をしていた。

「！ 誰？」

「俺か？俺の名前は異界塵。そうだな・・・永琳の古い知り合いだな」

「そうね。何億年ぶりかしら？」

まあそうだなそれぐらいになるのか

「な、何億！？」

どうやら輝夜は知らなかつたらしい

「で？どうするんだ？」このままここに隠れてるわけにもいけないだろ？」

「だから貴方を呼んだんじゃない」

「つまり強行突破すると？」

「無理よ…3人で月の力に勝るとでも？」

「なーに言つてるんだ。」「ちはお前らを逃がさなきゃいけないんだから戦うのは一人だろ?」

「あの数を相手に一人で戦うって本気で言つてるの…?」
「そんなに居るのか?ぱっと見た感じあんまり居なかつたが。

「いいえ、姫様。塵にならできるのよ。」

「で、作戦は?考えてあるんだろ?」

「ええ、まず私が姫様を連れて行くふりをするわ。そのあとあの車を占拠して私たちは逃げるの」

「で、俺が追つての足止めをすると。」

「なんだかんだで結局俺はかかわらなきゃいいかんのか。

「じゃあ姫様。行きますよ」

「…・わかつたわ」

輝夜もしぶしぶその作戦を呑んだようだ。

「それじゃあ…・無事を祈るぞ」

「ええ、貴方」

会話を終えた後俺は分身をおいておいた場所に移動し待機する。
するどすぐに永琳と輝夜が出てくる。
そのまま光の中へと消えていく。

その刹那。光から一つの影が落ちていくのが見えた。
そしてその光は月とは違う方向に動き出した。

そして俺はこのまま月人の攻撃を防げばいい。それだけのはずだつ
た。

しかしその計画は僕くも崩れ去ったのだ。

偶然、というべきなのだろうか。
偶々永琳たちが乗った光が影に隠れ、

偶々月人が放った玉の流れ弾が兵士に当たり、

偶々兵士たちが動けるようになってしまい、

偶々兵士が放った矢が月人に当たり、

偶々その月人が偉い役職で

月人がこちらに攻撃してきたのだ

「マジかよっ！」

「怯むな！ 打てー！ 打てー！」

兵士長が指令を出す。

だが相手は月人、装備の力の差で圧倒的に押されている

くつーどうする？ このままでは兵士達が危ない！ この状況じゃ飛べ
ないので永琳たちの護衛もできない！

そのときある叫び声が聞こえた。しかも聞き覚えのある声だ。

「うわああああー！」

「、この声はまさか！

あわてて振り返るとそこには妹紅の姿があった

くそつー。靈氣やら靈力やらが混じつて氣が付かなかつた！

このままだと妹紅が危ない。そう思つて走つて救出する。

それと同時に先ほどまで妹紅が立っていた場所に矢が突き刺さつた。

「妹紅！あれほどついて来るなと言つただろー！」

「「」、「めんなさいー！」

どうする？このまま見守るか？それとも化け物扱いを受けてでも飛んで止めに入るか？

そう考えていたのがいけなかつた。

グサツ

「グハツ！」

ドサツ

俺と妹紅が振り向くとそこには矢が刺さつた藤原不比等が倒れてい
た・・・

第一 six 話 ～月人再び～（後書き）

第一 six 話どうだったでしょうか？

え？クリスマスは何をしてたか？

24日は某2525するサイトを巡回しました

25日はスーパー マリオワールドというゲームでマリオを30分のうち何回ボムヘイで倒せるか。という遊びをしてました。結果は50マリオでした

感想、アドバイス、批判、訂正したほうがいい点などありましたらいつもどおりお待ちしております

第一？話 ～暴走～（前書き）

どうも皆さんお久しぶりです。筆筒です。

とりあえず投稿が遅れたとき恒例の言い訳をしますと（おい
新年を迎えるなかなかなかPCに触れない + 宿題が終わらないといつ難関
がありました

そしていざ書き始めてみると納得がいくものができず書いては消し
て書いては消しての繰り返しをしていました。更新できないことに
あせり「妥協」という形で今話を更新しました。

なのでいつもよりさらに駄文+かなり短めです
楽しみにしてくださっている方、申し訳ありません。

それでもよろしいという方は第一？話どうぞ

?CAUTION！? 今話はいつもより多田の残酷表現が含まれ
ます。注意してください。?CAUTION！?

第一？話 ～暴走～

side 妹紅

「父上！」

私が師匠に助けられた直後、背後から何かが倒れたような音が聞こえた。それを見た瞬間私は叫んでいた。

なぜ父上が倒れているのか？

なぜ父上に矢が刺さっているのか？

考えるよりも先に体が動いて師匠の腕を解き父上に駆け寄っていた。

嘘だ 父上が死ぬはずが無い。 そうだ、そうに決まっている。きっと芝居をしているに違いない。

なのに・・・なんで・・・

「妹紅・・・俺が死んだらお前の師匠について行け・・・お前の世話ぐらいはしてくれるだろう・・・・・」

死なないで・・・

s i d e o u t

s i d e 麼

なぜだ？なぜ月人は俺にかかるとき俺の大切な人を殺す？

過去でもそうだ。月人が俺の友人を殺した。

いまでもそうだ。月人が俺の知り合いを殺そうとしている。

未来でもそうだ。月人がおれの一一番・・・一番大切な人を殺す。

なぜ？ナゼ？何故？

だから殺す。殺されたから殺し返す。

そう結論を出したときには俺は行動をしていた。

シユツ

グサツ
ズシユツ

この場の何者にも捕らえられぬ速度で

この場の何者にも耐えられぬ一撃を

月人の一人の与える。

刀をその血が伝う

血、

血、

血、

血、

血？

そうだ血だ。

それがどうした？今までにも沢山見てきた血だ。

そう。

あかい

アカイ

赤い

紅い

紅イ

フフフフ・・・・ハハハハハツハ！

死を！

地獄より辛い死を！

血を！

何よりも紅い血を！

絶望を！

恐怖を！

こいつらに味あわせなければならぬ。

一気に殺しては絶望は生まれない。

一人ずつ・・・少しずつ・・・

再び刀を構えすぐ近くの月人を切る。

辺りに響く悲鳴。絶望と恐怖の音色！

しね

死ね

シネ

シンデシマエ

side out

side 紫

私は影でこのことをすべて見てている。

塵が月人を一人殺した。

そこからはまさにこの言葉が相応しいだらう

地獄絵図

いや、もしかしたらそれすらも生ぬるいかもしけない。

先ほどまで月人「だつた」肉片が当たりに散らばり、血の水溜りを

つくりつて、上空から何かを切つたような音と生き物とは思えぬ悲鳴と同時に振つてくる血の雨

月人の数は着々と減つていき、肉片が少しづつ増えていく。

何故塵は月人にここまで怒つているのか？

確かに知り合いを一人殺された。それだけで怒る理由は要らないかも知れない。

でもここまでするとなると話が違つてくれる

塵と月人には何かがあるのか？過去に、いや、もしかしたら一万年ほど前に未来へ行つたとき。
わからない。

ただ・・・一ついえるのは今の塵は正常じゃない。精神状態はもちろん、それ以外のなにかが塵を操つているような、そんな感じが私には見てわかつた。

そう、自分の意思であつて自分の意思ではない。矛盾した状態。月人でなくとも近づいたものすべてを殺すという霸気。

妖怪の本性ともいえぬ物。

まるで暴走しているような。

塵は時がきたら自分のことを話すと言つていた。

このことと関係があるのだらうか？

彼にはわからないことが多いすぎる。

すべてを話してくれるときを待っているわ。塵。

side out

第一？話～暴走～（後書き）

第一？話どうだったでしょうか？

ハイ、短いですね。

最近何かと短いのばっかり書いている気がします・・・

実は投稿できなかつた間もすくすく評価のチェックなどをしていたりしました。その際に日に留まつたのはお気に入り登録数です。

じつは更新できていない間に20件から30件ほど増加しているのです。

それをみるたびに心が痛くて・・・

筆者がこんななんじゃダメですね。よし がんばるぞ！

いつもどおり感想・アドバイス・批判・訂正したほうがいい点などありましたらおまけしております

第一ハチ話 ～事件の行方と不老不死の薬～（前書き）

どうも筆筒です。

遅くなつて申し訳ありません。今回は書いて譯することもあります。

それでは第一ハチ話、どうぞ

第一ハチ話 ～事件の行方と不老不死の薬～

あの忌々しい事件から数日が過ぎた。

すべて丸く収まった。

はずも無くいろいろと大変だった。

先ず一つに兵士の死に方。この時代ではありえない死に方。そう、何かがすごい勢いで通つて貫通したような傷跡がある。（藤原不比等は偶々弓矢であったが）

鉄砲は確か戦国時代に伝えられたものでありこの時代には無い。

よつてこの兵士の死体を消さなければ歴史を変えかねないので消さなければならぬのだ。

この点については竹取物語の富士のぐだりを利用させてもらった。帝が岩笠という人物の名前を使い不老不死の薬を兵士と共に燃やすように命じさせたように記憶を操作した。

記憶を操作するのは好ましいことではないのだがこの際仕方が無かつた。

因みに不老不死の薬は俺が管理している。

因みに輝夜と永琳が逃亡したことに関してはすでに記憶修正がされていた。地上の人間に任務を失敗したところを記憶されるなど月人のプライドにかかるのだろう。

ついでに月人の死体と弾丸などの科学力に関する物も回収されてい

た。

「妹紅、少し出かけてくる。留守番をしていてくれ」

「・・・わかりました」

あの事件以来妹紅は元気が無い。実の父が目の前で死んだのだ。当たり前だろう。

だが再び元気を取り戻すと信じている。俺がそうだったよう・・・。

因みに出かけるといったが行くあてもあるわけではない。

本来原作では妹紅は帝が不老不死の薬を燃やすように命じて富士山に人を派遣したときに岩笠という人物から薬を盗み不老不死になるのだが帝からの命令はすでに出てしまっていることになってしまっておりで実行されない。つまり妹紅が原作どおりに不老不死になれないのだ。

ここまで俺の知っている歴史と変わってしまっているので妹紅が不老不死にならなくても余り関係が無いのだが一応は歴史どおりの展開にしたいのだ。

だからあえて俺は出かける際に薬を見やすい位置に出しておいた。これでも妹紅が薬を飲まなかつたらそのときはそのときだと考えている。

師匠がどこかに出かけた。

私は少し考えていた。今回の出来事を、父の死を。

そしてこりこり考えにたどり着いた。

「父はかぐや姫を愛して死んだのだ。そのかぐや姫さえ愛さなければ父は事件当日に屋敷には行かず死ななかつた。かぐや姫さえ居なければ・・・」

そして思いついたことは

復讐

そのためにはどうすれば良いか？ふと机を見ると机の上にふたをした小壺がおいてあつた。

小壺には「不老不死」と書いてある。

たしかこれはかぐや姫がお爺さんとお婆さんに上げたがお爺さんとお婆さんは「どうして命が惜しかろうか。誰のために長生きしようか。何事も無駄になつてしまつた」

とかいつてそのまま病に倒れ死んでしまつたので師匠がもうつてきたのだとか。

これを呑めば少しでも嫌がらせになるのだろうか？

それにはかぐや姫はただの人ではないなら人よりも長生きするのだろうか？ならば不老不死になればどこに行つても復讐することができる・・・？

どうせ呑む人が居ないなら・・・かぐや姫に復讐できるなら・・・

私は小壺の蓋をとり、その中身を一気に
そして私は想像をぜつする苦しみと共に意識を手放した・・・

side 塵

「ふむ・・・そろそろか?」

出かけてから数時間が経った。そろそろ戻っても平氣だらう。そう
思つた俺は自宅へと足を動かした。

丁度家に着いたころ家から「そー」と誰かが出てくるのが見えた。

「そんなこそこそとしてどうした?妹紅」

ビクッと人影が動いた。そしてゆっくりこちらを向いて

「しつ、師匠!?

「どうしたんだ?そんなあわてて。飯にするぞ」

「え?」

「どうした？」

「で、でも……」

「見た目が変わっている。と言いたいのか？俺にはお前は何も変わつていな様に見えるけどな」

「師匠……ありがと。やあこまか・・・・・」

妹紅が小さく呟いた。

「あ、そりそり。飯食い終わったから引っ越すから
あいつらと重要なことを言い放つ

「…? 何ですか？」

驚いたように妹紅がたずねてくる

「そりゃあ俺にはお前が変わらないように見えても他のやつらから見たら極端だらう。俺の都合もあるしな」

まあ都には最近少し顔を出しただけだから問題ないけどなと付け加える

「はあ・・・私の理由はわかるとして師匠の都合って何なんですか？」

「ん？ 僕妖怪だからこれ以上体変化しないから村とか転々としてるんだよ。」

「どうなんですか・・・ってええええーー？」

妹紅が更に驚く

「というわけで、飯食つぞ。まあ、俺は食わなくとも大丈夫だがな」

そんな感じで妹紅に俺の正体を明かし引っ越すことを妹紅に告げて一人分の昼飯の準備を始めた

side 妹紅

驚いた。まさか師匠が妖怪だなんて。私もついさっき不老不死になつたばかりだから余り人のことをいえないのだけどね。

後々考えてみれば師匠には人間としてはおかしい部分が少しあつた。

一つに数年間一緒に居るのに身長や体格に変化が無かつたこと。世間的に言つなら師匠は「青年」というレベルだと思つ。

一つにじっくり早く起きても師匠は私より早く起きて庭で刀の練習をしていること。おそらく一睡もしていないのだと思う。

他にもあげるときつが無くなりそうなのでこれ以上は言わないでおこう。

しかし・・・引っ越しのか。どこに引っ越しするんだろ?遠いところに行くのだろうか?それともあまり遠く無い場所に行くのだろうか?どちらにせよ私は師匠の弟子。師匠が行くところになら付いて行きます。

そんなことを考えながら昼ご飯を食べていた。

因みに師匠は外で修行をしている。師匠曰く、「どうせ正体を明かしたのだからいつもどおり人間を装わないで生活する」だそうだ

私は師匠に一つ近づいた気がしてすこし

うれしかった。

第一ハチ話～事件の行方と不老不死の薬～（後書き）

第一ハチ話どうだったでしょうか？

なんだか最近文がうまくかけないんですね・・・
ハツこれがスランプってやつか！？（え

クオリティが悪くてもいいから早く更新するか、時間がかかってもいいから少しでもクオリティを良くして更新するかどっちがいいんですかねえ・・・
まあ元々僕の小説にクオリティなんてあつてないよつのものですが。

とこりわけでアンケートを取ります。

- 1、時間がかかってもいいから少しでもクオリティを良くする
- 2、クオリティが下がってもいいから少しでも早く更新する

どちらかの番号を感想のほうに書いていただけるとうれしいです。

ついでにいつもどおり感想、訂正したほうがいい点、アドバイス、批判などありましたらお待ちしております

第一～話～一年趣味～（前書き）

更新遅れて申し訳ありません

今日から春休みやあ！

いつもこのときに遅れ多分の更新力バーするでえ！

それでは第一～話どうぞ！

第一？話 ～1年趣味～

side 妹紅

師匠と旅を始めてどれぐらいいたのだろうか。もつ覚えていない。一応30年ほどまでは覚えていたのだが不老不死のせいで体が変化しないのに年を数えることが巴からしくなってきてやめてしまった。そもそも不老不死に年齢など無い。ただその時を過ごしていたというだけの記録が残るだけだから。

因みに師匠は今、自分の部屋にこもっている。なぜなら師匠は今「1年趣味」を行っている。

1年趣味って何?と思つた人も多いだろう。

師匠はふと何かをやりたくなると自分の部屋にこもってしばらく出てこないのだ。

しかも睡眠、休憩、食事などの本来生きるために必要な行いの殆どをしていない。

その時間にして丁度1年。こもり始めてから秒以下の単位までぴったりあわせて丁度1年後に部屋から出でてくる。なので私が「1年趣味」と命名した。

24時間365日を一つのことにつこやすので当然出でくるときはとてつもなく美味くなつて出でてくる。

その美味さを数値にしてみる。

並の人間を1とし人間の限界を10としたとき師匠は50となつて出てくる。

料理に関しては普通の人間が師匠の本気の料理を食べたらもう師匠の料理以外は不味く感じるほどだらう。

そこまでうまくなれるのは師匠の能力、「ありとあらゆるものに適応し能力として使う程度の能力」のおかげでもあるのだろうが。

まあ師匠は1年趣味を終えた出てきた後は飽きて滅多にその腕を披露しないのだが。

「つて、師匠に暇なら日記でも書いてろって言われたけど書くことなんて殆どないよなあ。仕事があるわけでもないし・・・」

「そう私、妹紅はただいま絶賛暇中なのである。
しなきやいけないことも無い。」

「することも無い。
話す相手もない。」

「たまに依頼が来て簡単な依頼は受けているが大きな仕事は師匠がまだ早いといって受けさせてくれない。」

「ある年に師匠が1年趣味を始めてから出てくるまでの間を秒単位で測つたがいろいろな意味で精神が崩壊しかけた。
もうあんなことはしたくない。かといって師匠が出てくるまで後100日。まだまだ先である。」

「仕方ない。今教えてもらつてる分の妖術の復習でもするかー。」
「妖術は本来人間が使えるものではないらしいが師匠が頭に手をかざしただけでなぜか使えるようになつてしまつた。
なんというかやはり師匠の能力はちーとである。」

「えつと、大切なのはイメージすること。体の中に流れる妖力を感じてそれを手の上に炎として出す。・・・よし、できた」

「これができるようになるまで1週間はかかった。最初のうちは妖力の使いすぎで何度も倒れることもあったが今はそんなことも無い。」

「さらにこれに妖力を少しづつ加えて行く。これで少しづつ炎の玉が少しづつ大きくなつていく・・・うん、いい感じ」

その作業を終えた私は考える。少しごらり無理をしてみても良いんじやないかと。

無理とは今まで私は炎の玉を一度に一つしか出したことが無かつたが、一度に複数出すということである。

「まあ・・・大丈夫でしょ」

side out

side 塵

ふー、終わつた終わった。俺は今まで丁度1年間茶道を独学で勉強してきた。

久しぶりに外を見ようと扉を開けた瞬間鼻にわずかな灰のにおいが入ってきた。

何だ?と疑問に思いつつ歩を進めるとそこは・・・

大惨事になつていった。

「はあ！？」

何が大惨事つて家の三分の二が焼けている。そこに愛想笑いをして立つてゐる人物が一人居た。

妹紅である。

「・・・さてはお前、一度に複数の火の玉出しだろ」

「ギクつ・・・」

「出したな！出したんだな！出しだら！三段活用！…」
と某幻想殺しの台詞を真似しながら妹紅に迫る

「す・・・すいません！」

「あれだけ言ったのに・・・というか家の中で炎出すか！？普通
いつたん間をあけてから
「家が燃えるのはぜんぜん構わないがこんな事して周りから怪しま
れたらめんどくさいだろ？」

「うう・・・」

何も言ひ返せずといつたところか。

「まあ俺が基礎しか教えてなかつたのも悪かつたが・・・よし、修
行するか。俺でも同じことを1年間もやり続けると飽きるんでな」

(じやあなんで1年間こもつてゐんだろう・・・?)
そんな妹紅が疑問を抱いてる間にも準備を進めて行く。

「ま、そろそろ大きな技とかもやるひつと思ひしそれなりの場所が必
要だよな。といふわけで行きましょうか」

「行くつてどこへ・・・?つてえええええええええ
質問に答える前に妹紅は俺が作った穴に落ちる。

「修行するなら広いほうがいいだろ?つてもう居ないか
そつこつて自分の足元にも穴を作り落ちる。

さて妹紅がどれぐらい強くなるか楽しみだ

第一？話～1年趣味～（後書き）

前回アンケートを取つた結

2のクオリティが下がつてもいいから少しでも早く更新するのほつ
が多かつたので、

次回からはできるだけ早く更新できるようがんばりたいと思ひます
感想やアドバイス、批判などありましたらお待ちしております

第20話 ～弟子の修行～（前書き）

どうも筆筒です。

春休みとか言ひておきながら結局一話（前話）しか更新できなかつた・・・。
くわう・・・妹紅にどうせ修行させるなら原作のものをつて考えたのが運の呪い、
どうしてこうなつた

妹紅のスペカつてどんなのがあつたつけ

EX妹紅のスペカ2枚目まではみれてねえw

2、3週間ぐらいがんばる

某サイトで攻略動画見ればいいんじゃない？

ところかスペカ自体を動画で見ればいいんじゃない？

あつ・・・

できるだけ早く更新するといつたのにこんなに遅れるとは・・・。
まあそのための「できるだけ」なんだよ♪チコーン

いきなり撃たれた！ひどい！

これからも「できるだけ」早く更新できるように頑張りたいと思います・・・

塵「信用性がねえな」

セリフとらぶることにわれた気がするが気にしない・・・

それでは〇〇の話どうだいへー・

PS、塵の性格がちよくちよく変わるのは仕様です

第20話 ソ弟子の修行

ヒュッ　ドン　「オオ　ドドド　ドカーン

炎が飛び燃える音がするこの場所は自らが起こす音以外音がせず、何も無い真っ白な空間・・・つまり俺が妹紅の訓練のために作った空間である。

「ふははー甘いぞー！その程度では俺に攻撃を当てるなどできんぞおおおつー！」

「くつーまだまだー！」

訓練すること約数年、妹紅はかなり強くなつた。実力だけで言えばかなり強い妖怪とも渡り合える。

「はあつ！」

妹紅が掛け声と共に大量の札を投げる。これは俺が妖怪用に作り出したお札で妖力に反応してダメージを当てるものだ。

「だいぶスピードが速くなつたな。だが・・・まだ足りんぞオツー！」

刀を構え大量に迫つてくる札を切る。

「ならこれならどうだつー！」

そういうと妹紅は手に妖力を溜め、火の鳥に模した炎にして放つ。その火の鳥が通つたところが燃えはじめた。俺はそれを横に跳びよける。

すると燃え広がつた部分の炎の玉があらゆる方向に飛び始めた

「ふむ・・・面白い。だが・・・まだ足りぬ!」
足が地面につく前に浮遊術を使い炎の玉をよける。

「ああ! 今度はこちから行くぞ!」

そのしばらく戦い続けたがそろそろ妹紅が倒れそうなのでやめることにした。

とりあえず先にも言ったが妹紅は強くなつた。
しかしだ。まだ妹紅は実践というものを殆どしていない。今のよう
に俺と模擬戦のようなものはしているがこれは実践とはいえないだ
ろ?!

何故ならこの戦いは実践すると云いつつも、
練習でできても本番でできない。これは戦いだけでなく勉強やスポ
ーツでも同じことが言える。

沢山勉強しても試験会場の雰囲気でうまくできなければそれまでだ
し、練習で強くても本番になると緊張して何もできなければ一方的
にやられてしまつ。

つまりこの妹紅と本氣で戦つて引き分けになる程度のやつと妹紅
に戦わせたいのだ。

そこらへんの妖怪でも良いんだがそういうか殺し
合いになり片方が死ぬ。

別に妹紅は不老不死なので死んでも問題ないが一応弟子なのでそつ
簡単に死なせたくないし本人も死にたくないだろう。
どうしたものか・・・いや・・・までよ? 原作では紫の式神で有名

なあの人も居るのか？

2000年前後にはもう西のことは確定のはず。そこから狐が九尾になるまでの時間を逆算するととっくの昔に生まれているはずだ。だが問題はそこでは無い。問題なのは現時点で紫の式神になつているかどうかだ。まあ紫に尋ねるのが早い。

思ひ立つたらすぐ行動。え？ どうして面のわからぬ紫をどうやつて呼ぶか？ こうやってだよ！

サツとスキマを開いてあらかじめサーチしておいた場所に移動する。

・ ・ ・ 何というか・ ・ ・ すゞこ・ ・ ・ 爆睡中です・ ・ ・

え？ なに？ 幻想郷は放置ですかそうですか。まあなんとなく予想はできただけねつ！

でもこれで紫が藍に仕事任せで寝てるフラグが立つたぞ！

・ ・ ・ たぶんな

でもどうあるか。このままここに居ても来るわけ

「貴様なものだつ！」

その声と共に部屋に入ってきたのは特徴的なゾンビ帽、モフモフで
きそつな尻尾に金髪。

どう見ても藍さんです本当に（へ

どうことなんだよ・ ・ ・ おかしいだろ！ タイミング的な意味で

べつ反応すべきか・・・などと構えてこねと

「ハッ、まさか紫さまの命を…？」

とんだ勘違いです。でも本気で妹紅と戦つてもりひはこれがいいチャンスかもしねない。

とこつわけでの会話の流れに乗ることにした

「フフフ、その通り…や」で寝てこる妖怪の命を狙つものとのこの異塵 界とは俺のことよ…」

うわー・・・正直恥ずかしい。能力無かつたら顔真っ赤になつてすぐばれただろう。

「ならば消すまで…」

シコツと言つ音と共に突撃していく。俺はそれを避けて提案する

「しかしこの狭いところに戦つのはまじめんだ。お前も流れ弾をあいつに当たたかねえだらう。」

「・・・仕方ない。紫様を護るためにほその条件を呑んだまつが得策のようだな」

「場所は用意してある。なに、お前は立つていいだけでいい。その言葉と共に一つの影がこの家から消えた・・・

俺達がやつてきたところは広い庭・・・といつてもさつき俺と妹紅が戦つた場所で俺の家なんだが。

「では早速はじめるとするか」

「まあまあ。そんなにあせるな。それにお前と戦うのは俺じゃない」

「何?」

「お前と戦うのは俺の弟子だ。来い」

俺はスキマ（のひつなもの）を出して妹紅を呼ぶ

「何のようですか？師匠？って誰ですかあのひと。といつかっこ居ると殺氣のようなものをかんじるんですけどが！？」

何故か呼び出されたと思つたら呼び出された場所に一触即発の雰囲気をかもし出して居る妖怪がいるという状況に驚いている妹紅

残念だが君にはこの状況での拒否権が無いんだ

「修行兼命令だ。あいつと戦え。手をぬこうなんて考えるなよ？死

ぬぞ」

笑顔で妹紅にそう伝える

「修行で死ぬかもしれないってどうこういってどうですかー？」

妹紅が文句を言つてくる

「修行で死ぬかもしれないってどうこういってどうですかー？」

「ん、そのままの意味だ。とりあえずもうはじめて良いぞ」

「戦う本人が状況を理解してないようだが・・・行かせてもらひうぞ！」

藍が妹紅にすごい勢いで接近する。

「あぶなっ！」

ぎりぎりで妹紅が体をそらして攻撃を避ける。

「よくわからないけど戦うしかないみたいだね。」

妹紅が力を集め・・・

修行といつ名の戦いが今、幕を開けた

第20話 ～弟子の修行～（後書き）

第20話どうだったでしょうか？

とりあえずこの巻更新を何とかしなければ・・・

いつもおおお感想やアドバイス、批判や誤字脱字等ありましたらお待ちしております

PS - 一回生もたまにやつてます暇な方は探してみては？

（コーナー名はあちらでも同じです）

ただしあちらでこいつの話は禁止します。だって恥ずかしいじゃない

PS - パーティのまつも気まぐれで書いて気まぐれに更新しています
（コーナー名は以下略）

第2一話 ハ式の獣と地上の蓬萊人（前書き）

どうも筆箇です。

藍の口調が全然あつてゐるかわからん。でも自分の中ではこんな感じ。

絵がうまく書けるようになりたい。

画力があれば異界　塵の立ち絵を描きたいんだが生憎そんな才能がない。

それでは第2一話　どうぞ

第2一話 ～式の獣と地上の蓬萊人～

此処はとある家の大きな庭。現在そこでは2名が修行という名の死闘が繰り広げられている。

シユツシユツシユツ、ササササツ

二人のうちの一人がお札投げもつ片方がクナイのよつた形をした物を放つている。

お札を投げているほうが「藤原妹紅」

クナイのようなものを投げているほうが「八雲藍」

「「はあああああっ！」」

掛け声と共に弾幕が発射されお互いの玉が相殺していく。しばらくはそんな持久戦が続いていた。

「くつ・・・なかなかやるな！だが私も紫様のために負けるわけには行かないのだッ！」

先に大技を仕掛けたのは藍のほうだった。

大きな玉が発射されたと思つたら妹紅の少し前で爆発し、大量の小さな玉となつた

原作では式神「仙狐思念」という弾幕だ

これはいきなり爆発させ大量の小型弾幕を作つて相手の冷静さを奪う弾幕だ。

だがよく見れば爆発した後の小型弾幕の方向は一定でかつ自分自身

を狙う玉は多くはない。

冷静になつてよく見れば細かい動きだけで避けれれる。

寧ろ大きく動くと自分を狙つていの玉に当たるといつ仕組みだ。

「くつ・・・」

妹紅もそれに気がついたのか手に力を溜めながら自分を狙つてくる玉だけを避ける。

「いじもいくよー」

妹紅が溜めた力を放ちながら札をまく

原作では藤原「滅罪寺院傷」という弾幕だ

原作では自分に炎の羽を出現させてその辺りに使い魔を召喚し、一定距離進むとターンして帰つてくる札を上下にばら撒かせる弾幕だ。気合で避けようとする前にから来る札と後ろから来る札に注意しなければならず集中しないとたちまち被弾してしまう。

実は使い魔に密着すると比較的安全だつたりするのだがそれは原作の話。

実際の戦いでは使い魔の玉があたらなくとも妹紅本人が攻撃できるので意味が無い。

それを見た藍は攻撃を中断し避けに専念する。

最初は後ろから来る札に苦戦していたがすぐ体制を建て直し難なく避ける。

「なかなかやるね・・・

「そつちこそやるじゃないか。だが・・・いじも手短に終わらせなければならない」

藍はいつたん言葉を言ってから

「どうだ？お互に次の一撃に全力をかけて力勝負と行ひりじゃな
いか」

「わかつた。いいよ」

妹紅がそれを了承するとお互いに距離をとる。そして力を溜めるこ
とに集中する。

辺りにものすごい威圧感が流れる。あらかじめ認識妨害の結界等を
張つておいてよかつた。

「わい・・・」

「こくよー」

「「ハアアアアアアアアアアアッ」」

ゴオオオオッという音と共に両者から今までのよつたな弾幕ではなく
ビームのようなものが発射される。

そして2つのビームがぶつかり合つと更に大きな音を立ててお互い
を飲み込もうとする。

『今のところは』両者互角といったところだが、ぶつかりあってから
進展が無い。

しかし

均等を保っていたビームが徐々に妹紅の方へと移動していく。

「くつ！」

何故この妹紅が押され始めたのか？それは簡単なことで、妹紅の妖力が切れてきたのである。

車がガソリンが無いと動かないように

PCが電気が無いと動かないように

中身が入っていないペットボトルの中身が飲めないよ

行動を起こすにはそれに必要なものがある。

ではそれが行動を起こしている最中になくなつたら？

ガソリンや電気が途中で無くなれば車やPCは途中でも止まってしまうし、

中身のあるペットボトルを飲んでいても中身が無くなつてしまえばそれ以上は飲めないのである。

だから妖力が無くなり始めた妹紅が発射しているビームの威力が下がり飲み込まれ始めているのだ。

それだけではない。藍が徐々に力を更に開放し始めているのだ。つまり最初の均等なぶつかり合いは藍にとつて様子見だったらしい。

まあ妹紅が藍に負けるのは予想済みだ。そもそも一人では生きている年数と戦ってきた数が違う。

妹紅は修行を始めて数十年、実戦は殆ど無い。

対して藍は自分の尻尾が九尾になるまでの時を生きて、しかもその間に実戦も沢山経験しているだろう。

などと考えてこらビームのよつなものは妹紅のすぐそばにまで迫っていた

ただ自分の弟子が怪我して終わるのもなんなので

乱入しようか。といつても修行という名の戦いを止めるだけだが。

妹紅がビームに飲み込まれそうになつた瞬間に近づき、

「妖力を・・・切るひひひううつー」

剣技「妖斬」

文字道理妖力の塊が真っ二つに切れてそのまま俺と妹紅の横を通りすぎて行く

「さて、妹紅、ここまでだ。休んでろ」少し睡然としていた妹紅は黙つてうなずく。

「お前・・・どうこいつつもりだ?」

「どうこうも何もお前と妹紅を実戦レベルで戦つてもいつのが目的だったんだが」「

「何故だつー?」

「んー? そりだな・・・異界 塵つて名前ぐらいは紫から聞いてるだろ? 」

「・・・証拠は?」

あの反応だと紫から俺のことはいいに聞いてる感じ。

「証拠なら・・・あれだな」

パチンッ と俺が指を弾くと藍の田の前にある紙が現れる。

「それを見れば俺が異界 塘つてことがわかるだろ? ああそりそ
う。異塵 界つてのは偽名だから」「
因みに藍に渡した紙は異界 塘証明書。名前だけ聞くとなんだそり
やと思うだろ? 」

これは何かといつと、その名の通り俺が異界 塘であることを証明
する紙で、紫が書いたものだ。

なんでも妖怪とめんべくそこになつたらこれ見せ付ければ大抵
収まるということ。

あの紙に何が書いてあるのかはよく知らないが妖怪にあの紙を見せ
ると手を引いてくれる。

「・・・わかつた信じよ。この紙を持つているのは紫様と友人の
塵様しか居ないからな」

「信じてくれるならめんどくさいことにならずに済むな

「でもなぜ私と彼女を？」

「あこつは俺の弟子で」「ああああん~」こんな感じで何をやつしていいの?」「おこ紫。如何に台詞を重ねるな

「あら~じめんなさいね?」

(せりてえ謝る氣ねえ・・・)

まあこつもどおりでそれはそれでよいのだが。

「紫様!?

そして突然の状況に驚く藍。

「わうわう。藍?夕飯はどうしたの?お願いしたわよね?」

「あ」

あー 勝負が白熱しててたから夕日が沈むのに気がつかなかつた。
まあ、なんと言つか・・・藍、ドンマイ!

「すいません!今から作ります!」

「今からじゅう遅いのよ!」

「まあまあ、こつをせめてやんな。元々こつに呼び出したのは俺
なんだし、お詫びに夕飯なんてぱぱっとつべつてやんよ」

「・・・まあ良いわ。ただしすぐ作りなやこよ?」

「はこはこ」

俺がそうこつた瞬間、紫たちこつむの場にこきなり机といすが出て

きて【4人分】の夕飯が準備されていたように見えただろ。

「・・・あら? ずいぶんと早いじゃない」

「だから言つたろ? お詫びだつて」

こつして今日も一日が流れて行く。

それが災厄へのカウントダウンとも知らずに

第2一話 ハ式の獣と地上の蓬萊人（後書き）

第2一話どうだったでしょうか？

もう少し早く更新できるようになりたいなあとか思いつつ書いてます。

また、弾幕の解説は実際にその弾幕を見たりよけてみたりして自分が思ったことを書いていますので、本当に本文の解釈で合っているかはわからせんので注意してください

あと、もう一つ小説の設定を思いついたのですがそれを書くべきか暖めておくべきか・・・いつもどおり感想、批判、アドバイス、誤字脱字等ありましたらお待ちしております

第22話 ～別れ～（前書き）

いつも筆苟です。今回は比較的早く更新できたかなと思います
(ただし繋ぎ件導入部のような部分なので短め)

時間がかなり飛びますがコレもフラグだつたりゲフンゲフン

では第22話ビーフ～

第22話 ～別れ～

「ふう・・・」戻つてくるのも久しぶりだな・・・ん?」

「どうしたんですか師匠?・・・ってあれ?」

どうなつている?空間移動の穴を出す位置は前回とまったく変わつていなはずだ。

なのに何故この場所は数百年も立つた様に姿形が変わつてゐる?いや、実際に数百年立つてゐるのだ。時間は止めておいたはずなのに・・・。

実を言うと妹紅と藍を戦わせた後俺と妹紅は俺が作った【外】とは一切干渉せず、更には時間すら進まないという空間で修行をして戻ってきたのだ。

が、なぜか進んでいるはずの無い時が進んでいるのだ。

「何故だ・・・?俺が能力の使用に失敗したとでも言つのか・・・?」

いやそんなことは無いはず。空間を作った時点では完璧だった。【外】の世界からは干渉不可だから【外】のものがどうこうもできなはずなのだ。

「まあいい・・・それより妹紅。俺がこの修行を始める前に言つたことを覚えているな?」
妹紅にたずねる。

「...はい」

「そんなくらいの顔をするな。お前は不老不死、俺は実質不老不死なんだからまたいつか会えるや。」

そう。俺が妹紅に言つた言葉は・・・

修行を始める前まで時をさかのぼるとじよづ。

「妹紅、お前に話せなければならぬことがある

「? 何ですか? 師匠」

「今回の修行がお前との最後の修行だ」

「え・・・それどうこいつ意味ですか?」

「そのままの意味だ。この修行が終わったら師匠と弟子という立場をなくして別れるんだ」

「ちよつと待つてください! 急すぎですよー。」

「俺はいろいろなことをお前に教えてきた。もともと俺がお前に教えるのは一人前になるまでというお前の親父との約束だったから長いくらいだ」

「で、でも・・・

「いいか妹紅。親といつものさびしきの意図があのつと大抵子に厳しくするものだ」

「え? どういう意味ですか?」

「人の話は最後まで聞け。お前はお前がまだ歳も行つていないうちに親父が死んじまつた。それでも俺はお前の親父との約束を果たそうと思った」

「約束?」

「お前を一人前にすると同時にお前の親父の変わりに父親のような存在になつてくれつてな」

「! ? お父様がそんなことを・・・?」

「あいつにはあいつの考えがあつたんだろう。俺にそういうたといふことは何かしら身の危険を感じ取つていたんだろう。」

あの事件じゃなくても生きている場所が生きている場所だから、と付け加える。

「・・・」

「だから俺はお前に厳しくしてきた。それが約束だから。でもお前は十分妖怪とかと戦つていける。だからこの修行を最後にして旅立つてほしい。世界を見てきてほしい。これがあいつの代わりとして父親の役割をやってきた俺の最後の願いだ」

「…分かりました」

「まあ今からやる修行は何百年もかかるんだがな」

「えつ・・・?」

とまあこんな感じだ。

「最後の師弟としての会話なんだ、出発する場所を指定してくれればそこまで運ぶぞ?」

「いや、ここで良いです。師匠と長年行動して伊達に生きる方法見つけてしませんから」

「そうか…ならいいでお別れだ。妹紅」

「やつですね…師匠。今までありがとうございました。そして

「うして俺達は文字通り別の道を歩き始めた。行き着く先は同じだらうが。

しかし、それにしても能力がうまく使えなかつたつてことは思つた
よつ早く【あれ】が進んできているのかも知れない。

何か対策があればいいのだが

第22話 ～別れ～（後書き）

第22話どうだったでしょうか？

久しぶりの1週間以内更新ということで短めでした。

（この速さでいつもぐらいの量で更新できればいいのですが…

時間を吹っ飛ばしたのはめんどくわかったからじゃないんだからね！
！フラグのためなんだからね！

いつも通り感想批判、アドバイスや誤字脱字等ありましたらお待ち
しております

第2参話 ～桜の木は～（前書き）

いつも、 簡単です。

できるだけ早く更新できるようにがんばります。

今回は書いてて台詞が多いかなーと思つたり。

相変わらずクオリティなんてものはかなぐり捨てますがよろしく
お願いします

それでは第2参話 ビックリ

第2参話 ～桜の木は～

妹紅と別れた俺はとりあえずどれくらい時間が経つてしまったのかを調べようとした。

が、その瞬間に紫が来たのでやめた。わざわざ調べるより聞いたほうが早いと思ったからだ。

「久しぶりだな。紫」

「久しぶりだな。じゃ無いわよ。今までなんだかんだで貴方の場所を探知できるようにしててくれたから急用があつても連絡できたのに何百年も探知できなくて困つてたのよ」

「すまないな。じつにも理由があるんだ」

「・・・まあ良いわ。今までの急用はなんだかんだで一人でも何とかなつたから。でも今回はそもそも行きそつに無いのよ」

「？　お前がどうやってもどうにもならないのは珍しいんじゃないか？何なんだ？」

本当は今はいつじるのか聞きたかったが結構深刻そうな話なのでやめた。

「実は・・・あつてほしい人が居るの」

「こりゃまた人間の屋敷にしてはでかいところだなあ・・・」

「あつてほしい人というのはこここの主の娘なの」

紫があつてほしいといったら・・・幽々子か？原作の通りなら一人は仲がいいはずだ。

「ふーん・・・で、そこに隠れてんのは誰だ？監視されるのは好きじゃないんだ」

「・・・私を見つけるとは、なかなかの御仁のようだ。監視していきたことはお詫び申し上げる。ただ、門をくぐって居ない来客が一人居るときまして・・・な」

そういうながら木の影から出てきたのは縁の和服を着て、腰に二つの刀をさげた老人だつた。

「あら、ごめんなさいね？妖忌。こちらも急いでいたので。紹介するわ、この方が異界 塵よ」

「成程、貴方が塵殿か。紫様からは話は聞いております。私は魂魄妖忌と申します。」

・・・その口ぶりだと紫は俺のことをいろいろと話しているようだ。面倒なことまで話してないと良いが。

「妖忌さんね。さつき紫が説明したとおり俺の名前は異界 塘だ。

よろしく。」

自己紹介されたのにも何も返さないのは失礼なので改めて自己紹介する。

「こちらこそよろしくお願いします。ところで塵殿は剣術の腕が腕が立つそうで……」

ふーん……なるほどね……いろいろ話を聞いていくようだ……

「ふつ……やめてくれ。まあ今は駄目だな。紫が人を待たせるみたいだし」

とりあえず適当に言い訳をしておく。

「そうですか……。それでは幽々子様をよろしくお願いします」
ここでやっと出てきた要人の名前。まあ紫の友人と魂魄の名の者が居る辺りで大体予想はついていたがこれで確信が出た。

「わかつてゐわよ」

一気に紫の表情が真剣な顔に変わった。

(これから起きることも大体の予想はつくがここから先はある程度流れに身を任せたほうがよさそうだな。)

そう結論付けた俺は黙つて紫の後ろを付いていった。

「あら……？ 紫じゃない……いつもより随分と早いのね。それと……後ろの貴方は誰かしら？」

この屋敷の庭を進み奥のほうまで進むとそこには一本の桜の木と一人の少女が立っていた。

おやりぐ・・・あの木が【西行妖】で少女が【西行寺幽々子】だろう。

「あら幽々子？いつもより早く来ちゃいけないかしら？」

そういつた後、紫はフフッと笑い

「冗談よ。今日は紹介したい人が居てね」

「俺の名前は異界塵。まあ紫から話は大体聞いてるだろ。よろしく。えーっと」

「私の」とは幽々子で良いわ。その代わり私も塵と呼ばせてもらつわ。よろしく

「分かった。別にかまわん。」

「まつ、紹介終わつたらいつもどおり話すべりいしかること無いんだけどね」

「いいじゃない・・・話すのも楽しいわよ?」

「幽々子が良いならいいのだけど」

それから何時間話をしていただろう。よくこんなに話して話題が尽きないなと思いつつ聞いていたら、内容が珍プレー黒歴史その他のい

ところだったので内容は翻訳させていただく。

「あら、もうこんな時間じゃない。それとも帰らなこと藍が怒りそうだわ。」

仕事まかせつめつだし つと紫が軽く

「・・・お前また藍に仕事まかせつめつなのかな。知らんが、そのつち愛想つかせてどこか行つても」

「良いの良いの。塵ほじりするの?」

「俺も明日の」とがあるからかうそひ歸るかな

「やひ・・・みんなやることがあるなら仕方ないわね・・・また来てね」

「じめんね幽々子。また来るわ」

「今日あつたばかりだったが楽しかったぞ。またな

「ええ・・・また・・・」

そして俺達は屋敷から出た。

「・・・気がついた？」

帰り道、紫がたずねる。

「あんだけ【死】の力振りまいてんだから気がつかないはずが無いだろ」

尤も、俺を殺すにはあの程度では駄目だがな。と付け加える。

紫が尋ねてきたのはおそらく西行妖・・・いや幽々子と西行妖両方か。

幽々子と西行妖は両方とも近づくものを徐々に殺す力を持っている。西行妖にいたっては枯れている状態であれほどの力をまいているのだ。満開にしたら普通の人間などはひとたまりも無いだろう。

故に

「あの屋敷で生きてるのは幽々子本人と魂魄家・・・元々か後からなったのかは知らんが妖忌も半分は死んでいるだろ。この場合半人半靈といえばいいか？」

「・・・ええそうよ。それに幽々子自身も今ではああだけど少し前までは口を話したらすぐにでも自分の首を絞めようとしていたぐらいなのよ・・・」

「で、どうするつもりだ?このまま現状維持つてこともしないだろ?」

「ええ。封印するわ。あの桜を次の満開の時にね」

「ふーん・・・。まあ俺の仕事は封印の護衛のことか。あれほどまでに靈氣やら妖氣やらを吸つた木が何も抵抗せずに封印されるとも限らないしな」

「分かつてゐるじゃない。これが朝言つた貴方にしかできなことよ。

「

「確かに、降り注ぐ死を気にせず妖怪桜の攻撃から封印役を長時間護るなんて俺ぐらしくにしかできねえな・・・」

「時が来るまでまだ時間があるわ。幽々子にはそれまで辛抱してもいいわ

「ま、がんばれよ。俺はそろそろ行くから

「ええ、分かつたわ。今日はあつがとう

「またな

「間に合つといいな

「え・・・?」

第2参話 ～桜の木は～（後書き）

第2参話どうだつたでしょうか？

ここは前々から書こうと思つていた場面でしたが難しいですね・・・

そういうばバトンでも書こうかなと思つてたりでも創つても回す人がいな（r y）

だから回つてこないかなーなんて考へてますがそもそも交流がある人なんてほとんど居ないので（r y）

つまり何がいいたいかと言うと人間関係は大切に（r y）

いつも通り感想批判、アドバイスや誤字脱字等ありましたらお待ちしております

第2?話 ～墨染めの桜、西行妖～（前書き）

“いつも筆筒です。

今回は今までに比べるとだいぶ長いです。

なので読みにくいかも。でも反省はしていないし、こうかいも（「ゆ

そんな感じです。

だが長くてもいつもの低クオリティに変わりはありません御了承を。

それでは第2?話 ビリル

第2?話 ～墨染めの桜、西行妖～

俺は紫と幽々子のところへ向かっている。

今日は例の桜、西行妖が満開になる日なのだ。

俺は数週間ぶり、紫は数日振りだそうだ。

紫は今日に向けて封印の術式を調整してたらしい。

「・・・封印できると思つか？」

「勿論。封印してみせるわ」

「そうか・・・」

「本当は貴方みたいな人がバツサリとあの妖怪桜を切ってくれたほうが早いんだけど」

「馬鹿か。あんな【死】の力を溜め込んだ木をきつたらどうなるかぐらいは分かるだろう」

花が全部散った状態でも通りかかる人を死に導く程の力を持つた桜を切つたりなんかしたらいいせいに【死】の力が漏れ出す。

人間の首の動脈を切ると大量の血がふきだすように、あの桜を切ると大量の死が漏れ出すのだ。

簡単に言つてしまえばあの桜の幹は人間の首で中をめぐる死の力が人の血だということだ。

そんな力が漏れ出したらどうなるかなんか考えたくも無い。

「分かつてゐるわよ。だからこつして封印の術式を調整してきたのよ

よ

「どうか。と返して再び歩き続ける。

今日は歩いてきたので門から入る。

「・・・？ 妖忌が居ない？」

「おかしいわね？ 買い物にでも行つてゐるのかしら？」

「()の時期に見張りの妖忌が()を離れるのはおかしいと思うんだ
が・・・まあいい。入らせてもらおう」

西行妖が満開になつてゐるからか前に進むたびに【死】の香りが強
くなつてゐる。

少し進むと人が壁に寄りかかつて倒れてゐるのが見えた。

「妖忌！」

「・・・紫様と塵殿・・・か」

「どうした！？何があった？」

「私のことはいい……。早く幽々子様を……つー

「妖忌…………紫ー先に行つてろー。」

「でもつー。」

「いいからー！お前は幽々子を助けるんだろー？妖忌のことは俺に任せで行け！」

「……わかったわ」

ゆかりはは妖忌に言われたとおり急いで幽々子の場所へ向かつた。おそらく幽々子の居る場所は西行妖の咲いている場所だ。

side 紫

建物の角を曲がるとそこには一本の桜と一人の少女が立っていた。その少女の手には包丁程度の大きさのナイフが握られていた。

「あら……幽々子じゃない……。」

「お願い幽々子。馬鹿な真似はしないでー。」

「お願い幽々子。馬鹿な真似はしないでー。」

「お願い幽々子。馬鹿な真似はしないでー。」

「近づかないで！」

「なんで…」

「紫には分かるでしょう？この桜の危なさを…かつて父と共に一番大切にしていたこの桜の力を！」

「だからって貴方が死ぬことは無いでしょう！」

「この桜は私と関係しているのよ。この桜のせいでは私は新しい力を手に入れてしまったし、この桜が妖怪桜になったのも父がこの桜の下で死んでしまってその精気を吸つたからなのよ？父と血のつながつている私と関係してもおかしくない！」

それにと一言おいてから

「私はもういやなの。自分の力で人を死なせてしまつことが嫌なの！」

「幽々子…」

「私は…私は！」

そういうと幽々子は手に持つていたナイフを首元に持つて行き

「！ 駄目ッ！」

走つて止めようとしたが気がついた時にはもう遅かった。

シユツ

とこう音と共に幽々子は自らの首の動脈を切断し

ドサッ

ところづ音と共に幽々子は血を流しながら倒れた。

「幽々子ッ！」

急いで幽々子に駆け寄つて名前を何度も呼ぶがピクリとも動かない。

「幽々子お・・・」

何とかしたいが私の能力でも命の境界を操ることはできない。
どうしてこうなつてしまつたのだろうか？　こつならないためにこの
桜を封印しようと準備をして来たのではないか？

そんな考へばかりが浮かんでしまつて本当に何をするべきなのかが
全然頭に浮かんでこない。

本当にどうして・・・

s i d e o u t

s i d e 霧

俺は妖忌の手当てを終えると急いで紫と幽々子の元へ向かった。

そこには、血を流しながら倒れている幽々子と泣きながら幽々子の名前を呼んでいる紫が居た。

「幽々子…………紫、始めるぞ」

「でも……ツ！」

「いや。やるんだ。今お前が幽々子のためにできることは何だ？ずっとそばで泣くことか？悔やむことか？違うだろ！？元々の目的は何だった！幽々子のためにあの桜を封印することだろ！？」

今の紫には少しきついかもしれない。でもそうでなければ駄目なんだ。俺の能力を使っても人を生き返らせることなんてできない。だからこそ今できなきことをしようとするんじゃなくて今何をするのか考えて行動するのが幽々子のためになるのだ。

「…………ええ。分かったわ。ごめんね……幽々子」

紫は西行妖から少し離れ、術式を組み立て始める。

西行妖はそれを察知したのか【目に見えない何か】を集め始めた。

紫が術式を組み立て終わり術を展開しようとしたその瞬間だった。西行妖が集めていた何かを紫に放ったのだ。

「くつー！」

俺は紫と西行妖の間に割りこんで刀でそれを受け止める。

「確かにさすがの紫でもこんなもんぶちまけられたら不味いだろうな。だがな、俺を殺すんだつたらこんなんだつたらぜんぜん足りないぜ！紫！西行妖のことは任せろ！攻撃は全部防ぐ。お前は術に集中しろ！」

「分かつたわ！」

そういうしていのうちに西行妖が先ほどのとは比べ物にならないほどの規模の死の力を放ってきた。

「つたくどうしたらただの桜なんかにこんな力が集まるんだつ！？」

西行妖は更に3発目、4発目を放つてくる。しかも確実に量が大きくなっている。

「くつ！」

ただ単に攻撃を防ぐだけなら簡単なのだが誰かを護りながら、といふと勝手が違つてくる。

今は能力を大きく使いたくないのだ。

これは時を止めるのを失敗してから調べたんだがどうも能力を大きく使おうとすると失敗しやすい状態らしい。

理由は分からないがこんな時に失敗などしてしまつたら大変なことになる。だから能力はあまり使いたくないのだ。

それから数分は同じことを続けていた。今のところ能力は使わずにすべての攻撃を防げている。

そんな風に考えていると西行妖が一際大きく死の力を集め始めた。

そして

「オオオオ」という音がしたと思ったら西行妖から今までのとは考えられないような量の攻撃が迫っていた。

不味い。量でさえさっきまでの比じやないのにこの量は不味い！

頼む！能力！しつかり発動しろよ！

「ウオオオオオオオオオオッ！」

雄たけびを上げると俺と紫の周りに大きな防御結界が現れる。

ズガゴゴゴゴゴオオオオオッ

死の力の集まりが結界に当たるたびに結界が揺れる。このままでは不味いと思いつつも、妖力を流し込む。

が、

喉の奥から鉄のような味がしたと思つたその時、

俺の口から赤い液体が飛び出した。

「がはつ！？」

「塵！」

「これは・・・恐らく死の力のせいではない。能力の使用の副作用だ。これは俺が思つたよりやばいことになつてゐる様だ。」

西行妖はそれを見逃さない。死の力を太い木の枝のように集めて鞭のよう何度も結界に攻撃を仕掛けてくる。

そのたびに俺の息が荒くなつていくのがわかる。

「くへつ・・・面白いぜ！俺がぶつ倒れるのが先か！紫がてめえを封印するのが先か！」

言葉を発するたびに口から赤い液体が飛び出す。

「塵！無茶はしないで！」

紫から注意される。

「くへつ・今無茶しないでいつ無茶をする！てめえは俺のことなんざ気にすることはねえ！」

「・・・わかつたわ・・・でも・・・」そのままじゅ・・・

「どうした。術式に問題でもあつたのか？」

「いえ、術式は完璧なの。でも私が予想していたより力の大きさが超えていてなにか鍵になるものが無いと封印できないわ！」

「くへつ・そうこうことか！」

でも鍵つていつたつて何がある？いや待てよ・・・鍵つてもしかし

て！

「・・・鍵に幽々子を使うわ。この桜が妖怪桜になったのは幽々子の父がこの木の下で死んでその精氣を吸つたからと幽々子は言つていたわ！その父と血の繋がりがある幽々子なら鍵としては十分よ！」

「わかった。だが紫。お前はそれで良いのか？鍵に使つたらどうなるかはわからんのだろ？」

「・・・ええいいわ。幽々子は言つていたわ。『私が困つた時は紫に相談する。だから紫がが困つた時は私を頼つて』ってね」

「だつたら急げ！」の結界ももつそつ長くは持たない！

「わかつたわ！・・・幽々子・・・あなたの体、使わせてもらひわ。

」

そんな話を聞いていたからなのか西行妖が攻撃をやめ再び力を集め始めた。

恐らくもうすぐ封印されることを悟つて次の一撃で決めるつもりなんだろう。

「いいぜ・・・てめえの全力の一撃をうけてめてやるぜ！」

西行妖は恐らしく自分に残つてゐるすべての力を集めたのだろう。今までの数十倍のおおきさである。

そしてその死の力が今放たれた。

ドゴオオオオオオオオオオ

攻撃が俺の結界と激突し大きな音を出す。

結界が大きく揺れる。

両方とも消滅することなく刀と刀の鎧迫り合いのようにぶつかり合っている。

「負けてたまるかよおおおおおおおー！」

ピキッ

結界にヒビが入る。

だがそんなことは関係ない。結界が崩壊してもよい。この攻撃を受け止めれば俺達の勝ちだ。

ピキピキピキッ

ヒビは徐々に大きくなつてゆく。

そして大きな爆発が起こつた。

そう、死の力が爆発したのだ。

それと同時に結界が割れる。

それはまるで死の力という太陽に照らされた結界というステンドグラスが割れたように綺麗だつた。

「いくわよ！」

紫から展開された魔方陣から大きな光が発射される。

その光は幽々子に当たり、更に幽々子から西行妖へと発射されて

先ほどまで満開だった桜から花が散り始めた。

そう、封印に成功したのだ。

そして散った花はどこか寂しげに空を舞つていた。

「おわった……か。お前が始めてだぜ……」の結界を翻つたのはな……紫……こんんだろ？出て来こよ！」

「あら、気がついていたの……」

「……封印が成功したから今回のことをとやかく言ひことは無い……だがこれだけは聞かせてくれ」

「なにかしら？」

「お前……わざと【鍵】を使わないといけない時に封印の術式を調整しただる」

「……なんで分かつたのかしら？」

「これでもお前とは長い付き合いだ。やれぐらに分かるわ。理由としては……そうだな、お前もつすう気がついていたんだりつ……幽々子の血殺を自分には止められなことを」

「ええ……そりよ。だからせてもの償って幽々子にも封印を手伝つてもういたの……まあ幽々子がどう思つてゐるかはわからないけどね……」

「でも……その判断のおかげでお前が一番望んだ結果になつたん

じゃないか？多少の問題はあるようだが

「へ.ビ.ウ.ニ.ツ.意味かしづ」

「ル.ウ.ニ.ツ.意味だ」

「あら？あなたたちは誰かしら？」

紫が振り返るとそこには幽々子が立っていた。

「ゆ・・・幽々子ー」

「なんで私を知っているのかしら？私眠っていたみたいなのだけれどもそれより前のことを思い出せないの・・・」

「記憶を失っているようだけど、これでまたやり直せるじゃねえか。記憶つてのは覚えておかないほうがいいこともあるんだ。思い出してほしことは今からゆっくり教えていけば良こそ」

「・・・ええー」

「つして幽々子は生き返った。ただ本人は殆どのことを覚えていないよでしばらへは紫と妖忌が側につくことになった。

「・・・」

おれは幽々子たちと少し話してからばれないように外に出てきた。
紫と幽々子のことは大丈夫だろ。なんとかなる。
俺にもしなくてはいけないことがある。しばらくあえなくなるだろう。

「いってしまうのね・・・」

振り向くとそこにはゆかりが居た。

「驚いた。ばれないよつにきたつもりだったがな。」

「貴方とは長い付き合いなのよ。それぐらい分かるわ。」

「やつつか・・・やつだつたな・・・」

「やつぱり、しまじか余えなくなるのかしら?」

「ああ・・・数百年つてところかな。熙りりんことある。」

「わかったわ・・・氣をつけて・・・」

「せうだな・・・また余つその日まで・・・」

「俺は足元に穴を作り落ちてゆく。」

そう、そこは何も無い空間。

暴走しそうになっている能力を治める空間

永い眠りにつくための空間

第2？話～墨染めの桜、西行妖～（後書き）

第2？話だったでしょうか？

おそらくこの小説では塵が一番苦戦したのがこの西行妖になると想います。

それほど苦戦しています（能力の制限をやれでいるのもありますが）

また次は時代が大きく飛びます。もともと時代は吹っ飛ばそうと思つたいたのですがいつまで書いてもそこにたどり着けそうにないので予定よりも早くとばしました（笑）

こんな駄文小説ですがよろしければこれからも読んでいただけるとうれしいです

第2語話 ～博麗大結界前編～（前書き）

いつも筆者の筆筒です。

前回のあとがきで書いたとおり話が一気に飛びます。
開始時期はサブタイトルで察している方も多いと思いますが、
博麗大結界が張られる少し前からです。

時代が飛んでも低クオリティ

それでは第2語話 どうぞ

博麗大結界

博麗大結界は常識の結界であり幻想郷と外の世界の常識を入れ替える（幻想郷の常識を外の世界の非常識にし、外の世界の常識を幻想郷の非常識にする）ことによって幻想郷と外の世界の往来を遮断する結界である。

またこの結界はとても強力で妖怪であっても簡単には通ることができない。裏を返せば一部の者は幻想郷と外の世界を往来できる。ただ、仮に出れたとしても力の弱い妖怪は幻と実体の境界によつて幻想郷に引き寄せられてしまうのだが。

これはそんな結界をめぐつて起つる出来事の話である。

「ふ～、こんだけ大きな結界を張るとなると大変ね～」

「何言つてるんですか。幻と実体の結界を張つた時も今回の結界も紫様は殆ど何もしてないじゃないですか！」

「あら？なんのことかしら？口を動かしている暇があるなら作業を

しなさい？」

紫はフフッと笑いながら「まかす。

「……もういいです」

はあと溜息をつきながらあきれる藍

「しかし、これだけ大きく、更には幻想郷と外を出入りできないとなると反対する妖怪も多いのでは？」

藍は紫に尋ねる。

「まあ少なくとも反対団体はできるでしきうね。もし争いが起きても妖怪同士が賛成反対を争ってくれるならいいのだけどもし反対団体の攻撃が人に向かつたら最悪ね、人間ばかり蠶殻にするわけにもいかないし、かといって無視しても人間が居なくなつて妖怪も全滅するわ」

でも、と紫は続ける。

「でもこの結界を張ることはとても重要なことなの。それだけのリスクを負つてもね……」

「何も無いことを祈ることしかできないのでしょうか……？」

「強力な助つ人が居ればいいのだけれどもね……あいつのような・・・ね」

「あいつ・・・とは塵さんのことでしょうか？あの桜を封印してから忽然と姿をくらませてしまった」

「居ない人を頼ろうとするだけ無駄だわ。今できる最高の結果になるように頑張るのよ」

地上最強と呼ばれた妖怪は

まだ姿をくらませたまま現れない。

「くつ・・・ツ！」

八雲紫は名もしらぬ大妖怪3匹を相手に苦戦していた。

（参ったわね。まさか結界の準備にこれほどの妖力を持つていかれるとはね・・・藍もすぐには来そうにないし、この状況でこいつら相手に戦うのも分が悪い。かといって逃げ出せば今まで作ってきた結界の術式が無駄になる。本当に参ったわね・・・）

紫はあせっていた。結界完成目前にして危機を迎えていたのだ。

（少なくとも藍が来るまで時間を稼ぐしかないよね）

紫は大妖怪の動きに注意しながら能力の発動の準備をする。いつもは感覚的に行える能力の発動も妖力を結界に持つていかれているせいでもうまく発動できないのだ。

「オラオラ！ 妖怪の賢者様がこんなことでくたばんのかあー！ もつと楽しませてくれよ？」

大妖怪の一人がそういうながら殴りかかってくる。

とつさに準備していた能力を使うと大妖怪の手の動きに合わせるように入スキマが出現する。

そのまま握られた拳はスキマに飲み込まれる。はずなのだが

「んなもんお見通しだぜえ！」

妖怪は振りかぶっていた拳を真っ直ぐではなく自分の左に放ち、その勢いで回転しながら裏拳を放つ。

「つー？」

予想していた場所と違う場所に出された紫はとつさに後ろに下がる

「おいおい。俺達のこと忘れてないか？ 相手は一人じゃないぜえー！」

紫が跳んだ場所に待つてましたとばかりに蹴りを放つ。

「なつ！」

蹴りを避けなかつた紫はそのまま吹き飛ばされ木に衝突する

「ガハツ！？」

衝突した勢いで肺に残つていた酸素が一氣に吐き出される。

「へへっ・・・ざまねえな！妖怪の賢者さんよお！」

もう一匹の妖怪が手に持つっていた棍棒を振りかぶる

（ます・・つ！）

思わず恐怖で目を瞑つてしまつ。頭で目を瞑つても避けることはできないと理解していくも。

そして覚悟した。次来る一撃を。それでも誰かが助けてくれるという淡い期待は捨てられなかつた。

妖怪の賢者は最後にこう思つ

（私らしく・・・ないわね・・・。ごめんなさい・・・）

徐々にちかづいて来る棍棒の音が聞こえる。

その一瞬はとても長く感じられた。数秒、数十秒、数分・・・

そして

来るはずの衝撃がこす恐る恐る田を開ける。そこには

「ぐわやあああっー？」

真つ一つに切られた棍棒を持っていた妖怪と

「遅れですまんな」

数百年前姿を消した妖怪の姿があつた・・・

第2話話「博麗大結界前編」（後書き）

第2話話どうだったでしょうか？

まあ展開は良くありそうな感じですね（笑）

なんというか・・・まあこいついつシーンが書きたかっただけ
前編後編に分けたのは前編後編という響きが好きでやりたかっただけ
けといいう救いようの無い理由。これじゃあいつ視聴者の方にピチュ
ーンされるか分からぬ

誤字脱字や感想、批判、アドバイス等ありましたらいつもどおりお
待ちしております

第2 si × 話 ～博麗大結界後編～（前書き）

どうも。筆者の箇笥です。

今回はどうも内容の薄いものとなつてしましました・・・

「前後半なんかに分けるからだろ」

うつ・・・外野から変な声が聞こえたがキニシナーライキニシナーラ

それでは第2 si × 話どうぞ

第2 side 話 ～博麗大結界後編～

side 紫

「遅れてしまんな」

懐かしい声とその姿を見て私は確信する。

そう、彼が帰ってきたのだ。伝説の妖怪と呼ばれた彼が。

彼の名は異界 塵。

「・・・大遅刻よ！」

笑いながら私は彼にそう返事を返した。

side out

side 塘

俺は長い眠りから目を覚ました後すぐに場所探知を使った。

現在の状況をするために紫と話すついでに能力が正しく作動するか確認したかったのだ。

そして風の力で紫の下へ移動した。

すると紫が今にもとどめをさされそうになつてゐるではないか。仲間がやられるのを見ているだけなんてことはできないので

「遅れですまなかつたな」と、妖怪を攻撃するついでにずっと眠つていたことを謝つた。

「・・・大遅刻よ！」

「ふむ・・・まあ話したい」とは沢山あるが先ずはこいつを蹴散らすことが先か。「

「ケツ！誰が俺様をけちらすだあ？妖怪の賢者と呼ばれるハ雲にここまで追い詰めたのは俺達だぜ？その俺達に一般妖怪のお前が勝てると思つてんのかあつ！？」

先ほど真つ二つにした妖怪の仲間がほえる。

「・・・無知は罪なりつて言葉知つてるか？俺と仲間に喧嘩売つたことをあの世で後悔するんだなッ！」

さあ、楽しませてくれよ？

「ふん。暇つぶしにもならんやつだつたな。・・・まあ5秒もつただけいじほつか」

「相変わらず貴方はやることが違うわね・・・いい意味でも悪い意味でも」

「ああいつやつらにはこれぐらいが丁度良いんだよ。・・・それでどうこうことだ?お前がわけなくあんな奴らにやられる筈が無いと思つんだが」

一番木になつていていたことを話す。別にあいつらを5秒で葬るのは俺じゃなくてもできる。本当にその程度の相手だつたのだ。そんな相手に紫があそこまでやられる筈が無い。

「仕方ないじやない。結界に力を殆ど持つていかれてるんだから。」

「結界・・・ああ・・・なるほどね」

今のは会話で大体分かつた。幻想郷にはある一つの結界が張られる。

一つ目は「幻と実体の境界」で幻想入りの要になる結界である。

二つ目は「博麗大結界」で幻想郷と外の世界の行き来を制限する結界である

紫の言う結界は恐らくこのどちらかだろう。

そして結界を張る隙を突いて妖怪が襲ってきたということは自分達に害がかかるということが明確なほうだつ。

幻と実体の境界は幻想郷にいろいろな者(人や文化ふくめ)が入つてくる結界なので自分達に害は無いと判断するだつ。

しかし博麗大結界は外との行き来を封じられてしまつ。そうなると外の人間が襲えなくなるのでとても害が無いと言えない。

以上のことから現在は博麗大結界が張られる前後・・・つまり1885年辺りである。

・・・自分は数百年ではなく千年ほど眠っていましたのかもしない。

「まあ・・・本当にすまなかつたな」

「いいわよ。別に貴方が長期間姿を消すのは珍しく無いことだし。ただ・・・今回は理由が理由だから少し心配したのよ?」

「能力の暴走・・・ねえ・・・」

自分で自覚しているつもりだった。この能力が蜜であると同時に自分に毒である事ぐらい。

なのに今回のような対処しか取れなかつた。もつといい方法は無かつたのか?

などと考えてみると

「さて・・・準備は終わつたわね。あとは儀式をするだけよ」

「ん?意外と早く終わるんだな」

そうたずねると

「まさか。そのほかの準備に沢山時間をかけてるわよ」(主に藍が

だけじね)

最後に紫が何か呟いたが聞き取れなかつた。

ただ、なんとなく聞くとめんどくさそうになつたことになりそつたので聞くのは止めておく。

「それじゃあ・・・メンバーを集めましょうか

1885年明治18年度、幻想郷に博麗大結界が張られ幻想郷の外から姿を消した

「で、結界が張れたわけだがこれからどうするんだ？絶対に反抗する妖怪が居るだろう。数匹が反乱を起こす程度なら問題は無いが大

規模となるためなんじくせることになるんだ?」

「やう、それが問題なのよ。何も考えてないわけじゃないのだけれど人間と妖怪が対立するとなるためなんじくせることになるのよねえ・。」

「だったらあえて結界を張ったのは人間ではなく妖怪だつて言つちまえば良いんじゃねえか? そうすれば少なくとも今回の件で人間には被害でねえと思うが」

「そりゃ上手くいけば良いのだけれどね」

「考えすぎても疲れるだけだぞ。少し休んだらどうだ? 気分を変えればいい考えも思いつくかもしないぞ?」

「そうね・・・そりゃせめてもうつわ。結界張つたりしてつかれちゃつたわ」

「やうか。俺は幻想郷を見て回ることにする。久しくあつてないやつにも会えそうな気がするしな」

こうして俺達は別れた。さて、どこから行きますかね? できるだけ花がありそうなところは最後に行きたいんだがな。

第2 s.i.X話～博麗大結界後編～（後書き）

第2 s.i.X話どうだったでしょうか？

今回最後にフラグのようなものを立てましたが回収するかは不明です。

いろいろと突っ込みどころが多いかもしませんが気にしたら負けです。

いつもどおり感想、批判や誤字脱字、アドバイスなどありましたらお待ちしております

第2?話 ～吸血鬼異変～（前書き）

皆様、久しぶりで「」やります。筆者の筆筒です。

このたびは1ヶ月以上も放置して申し訳ありませんでした
(何回目だよ-)の謝罪)

テストが終わってから書き始めたのですがなかなか上手く書けず書き直してたりしたら二つの間にかこんなことになってしまった。

というか塵の設定が書き始めた頃とだいぶ違つてきてるから良く分からんことになっております。rzn

そんな低クオリティな小説ですが読んでいただけたら幸いです。

それでは第2?話ひづれ

そういうえば前話で立てたフラグ回収していないなあ

第2？話 ～吸血鬼異変～

よろしい。ならば戦争だ

え…どうじこいつなつたし。

吸血鬼異変とは

博麗大結界などのせいで妖怪たちは人間や巫女などを襲えなくなつたことで妖怪たちが弱体化し始める。

そんな妖怪の気力が下がつていいく一方の幻想郷に吸血鬼が現れ始める。

その吸血鬼たちは強い力を持っていたため気力が下がつてゐる妖怪を手下にし幻想郷を支配しようとする異変である。

まあそんなことをしたら紫が黙つていないので。

で、紫のサポート係の俺は半ば強制的に戦わさせられるわけで。

「正直この程度の異変だつたらお前だけで十分じゃないか？」

「あら？ わつかしら。 一人で拠点を守りながら敵本陣を攻めるのは大変なのよ？」

「… じうせお前は防衛役とかいつて拠点に屈座るつもりだろ？」

「さあどうかしらね？」

「はいはい。 分かりましたよ」

因みに博麗大結界が張られてからこの異変が起るまで約100年である。

その間に幽靈移民計画とか言って冥界拡張したり、何かを悟った妖忌が白玉楼去つたりとまあいろいろあつたが省略させてもらひ。

「そりいえば・・・貴方今日は刀を使わないのかしら？」

「あん？ こんな異変この扇子一本で十分。 刀を使つまでも無い」

「… 本当にそんな装備で大丈夫なのかしら？」

「大丈夫だ。 問題ない。 … これで十分戦える」と証明してやるよ
俺は近くにあつた木に近づき扇子で「ちゃん」と叩く。

するとそのあつという間にその木は倒れてしまった。 しかも叩いた部分はただ折れているのではなく空間ごと切られている。

「… 貴方って本当にやる」とがぶつ飛んでいるわ

「褒め言葉として受け取つておく」

「はあ……で、やがて攻めるのかしら？それなりに数は多くて散
りまつてこないと困ります」

「うやうだよ」

パチンッと指を弾く。

「何も起じないこじやない」

「いや、お前に見えないだけさ。あの森一帯に幻術を仕掛けた。3
0分もすれば追い込まれた蟻みたいに本拠地に集まってくれると思
うぜ。」

「貴方にしてもやつ方が回つべどこじやない。こつもなうれいと
敵の総大将の前まで飛んで制圧してくると思つたのに」

：俺つてどんな見かたされてるんだらつ

「まあ體にはいいこう戦い方も良いかなつてな。それに吸血鬼とな
らそれなりに楽しめそうだからな」

「そんなこといつて失敗しないで頂戴よ？」

ヒヤツハ——戦争じやあああ！

20分待つといつて結局めんどくせくなつて10分しか待たずに出撃した。

なんというかがっかりだ。所詮吸血鬼といつてもこんなものか。

「残すといひはあと本陣だけか」

「ええ、そうね」

「コツとスキマから出でてきて紫がさつ返す。

「もつとましな登場の仕方は無いのか・・・？」

別に文句を言つつもりは無いが現れ方つてもんがあるでしょ

「ないわ」

即答された。まあいつものことだが

「まあいい。ほら、もう着くぞ」

そつこいながら飛んでるとそこには見事に紅い色の屋敷があった。

「・・・やつぱり貴方の運命は操れないようね？妖怪さん

「歓迎の言葉がそれってのも悲しいもんだがな」

「当然よ。歓迎しないもの」

「セコですか」

会話してこる相手はぜり見ても幼女体系の吸血鬼、レミコア・スカーレット。

世間じゃノンカリスマだとか言われてるけど、ぜり出で来て
い。どう見てもカリスマあるじゃねーか。

寧ろ体の9割がカリスマでできてるんじゃねーのか？？？さすがにそれは嘘だけど。

と、心底どうでもこことを考えていくと

シコツと空氣を切るような音と共にココアの姿が消える。
否、消えたのではない。「本来なら」肉眼では捉えられないほど
速さで迫ってきてくるのだ。

それを見た俺は体を反らして避ける。相手は長い間生きた吸血鬼、
当然初撃を避けただけで終わるはずもなくそのままの体制で腕を横
に振り追撃をしてくる。

だがそれは予想済み、迫つてくる腕を掴む。

「なつー？」

「おーおー、まだ交渉内容『罰ゲーム』を決めてねえぜ？そつあせんな」

そつ言い腕を掴んだてを上に上げる。腕を掴まれていたレミコアは宙に飛ぶ。が、そのまま落ちる「とはなかつた。

羽、吸血鬼といえばこれ。というランキングがあるなら間違いなくTOP5には入っていそうな体の一部の羽を使って地面に落ちる前に跳んだのだ。

「あら、そういえばそうね。まあ分かってるとは思ひけど私達の目的はこの場所の支配、私が勝つたら私に従つてもうつわ」

「俺達は・・・やうだな俺が勝つたら俺達の言つことを聞いてもらおうか」

「それじゃあ・・・はじめましょうか」

時は既に深夜、満月が昇る夜、二つの影がぶつかり合つた。
それは戦いの始まりを意味していた。

side 三人称

2つの影が何度も交差する。しかし、その交差には刀と刀がぶつかつた時起くるような音はない。

そう、2つの影は交差する時ぶつかり合つのではなく相手の攻撃を避けながら攻撃をしているのだ。

(あの扇子…ただならぬ力を感じる。あんなものに触つたら間違いなく負ける。此処は避けて攻撃するしかないわね)

そう、この方法に持ち込んだのはレミコアのほうである。

レミコアも伊達に長く生きているわけではない。見ただけでもあの扇子の危なさは判別できる。

そんな風に何度も交差するたびに塵に僅かに隙が生じた。

(畳み掛けるなら今ッ!)

ズササササササツ

と何かを切り裂くようなおどが辺りに響く。

普段の塵を知っている人なら塵らしくないと口をそろえて言つだらう。

血があたり一面に広がる

「どうよ?まだやるのかしら?」

勝ち誇つて宣言するようにソソリ言つ。

勝負あつた。誰もがそう思つただろう。

そつ、相手が塵でなければ。

「で、質量のある残像ぶつた切つて何喜んでんだ？それともそいつ言う趣味ですか」

普通なら出血死していそうな量の血を流した塵が喋つたと思つたら塵はちりの様に消えてしまつた。

「なつ！？」

レミコアは驚いて周囲を見渡す。が、塵の姿は見当たらない。体制を立て直そつと後ろに下がろつとした瞬間

「バーカ、どこ見てんだあ？」
レミコアが下がろつとした位置に塵は立つていた。

「まあいい。…死にたくないからでた「それ」はレミコア
うなやつはあまり殺したくないからな」

塵が手に持つていた扇子を開きスッと振るひ。
すると

ヒュンとこつ音がしたかと思つと扇子からでた「それ」はレミコアの顔の横を通過し、そのまま後ろの木に当たつた。
そしてそのまま木が倒れる

はずだつたのだが

なんとその木はまるで溶けるよつに消えてしまつたのだ

「な・・・？」

絶句するレミリア

「驚いたか？この扇子には能力がある」
落ち着いた様子で答える塵

「能力？」

紫が塵にたずねる

「ああ、そうだな・・・【消し去る程度の能力】と言った所か？まあ靈力でも妖力でも良いから使用者の力が一定以上ないとただの扇子だがな」

「くつ・・・・まだよー」

「もう一度言つ。話し合いで解決できそうな問題を殺して解決したくない。死にたくないければあきらめろ」

「誰があきらめるつて！」

「そつか・・・これが最終警告だ。死にたくないなら動くな。そして負けを認める」

塵が再び扇子を2・3度振るつ。すると先ほどとは比にならない量の光線が飛んでいく。

そう、動かなければまつたくあたらない位置へと。

「・・・警告警告つて、吸血鬼なめてんじゃないわよー」

まともに戦わない塵に怒ったのかレミリアが塵に突っ込んでいく。

「そつか、残念だ。」

そういうと塵の姿が一瞬ぶれる。

そして、

周りで見ていた紫、レミリアの従者、戦いを見ていた野次馬、そのだれ一人がその瞬間を見ることができただろうか。

そう、塵は辺りの一団がその瞬間を捉えることのできない速度でレミリアの後頭部辺りに扇子で一撃を入れたのだ。

「がはっ・・・!？」

「だから言つただろ、最終警告だつて

そしてこの吸血鬼異変は、塵のあつけない一撃で幕を閉じたのであった。

第2？話 → 吸血鬼異変（後書き）

第2？話どうだつたでしょうか？

さつわと時間を進めたいので一話一話がハイペースなのは御了承ください。

と言つかこんなにこつちの更新もできないのに新しい小説も書き始めようとしているばか者です

こんな筆者ですがどうぞこれからもよろしくお願いします。

いつもどおり感想、批判、アドバイス、誤字脱字等ありましたらよろしくお願ひします

第2ハチ話 ～スペルカードルールと異変の兆候～（前書き）

どうもお久しぶりです。

某サイトで放送したり絵を描いてたり

何度も書き直していたらこんなに送れてしまいました・・・

今話の内容を書き直してるうちにまつたく違うものになっていた
どうしてこうなった

久しぶりの投稿なのにとても短いなあ・・・

そんな第2ハチ話 どうぞ！

第2ハチ話 ハスペルカードルールと異変の兆候

「よつと・・・小さいな リリース」
ピチャッと今釣った魚を川に返す。

「どう? 釣れてるかしら?」

いきなり後ろから話しかけられる。声からして紫だつ。
まあスキマが出てきた時若干妖氣がもれていたのでいたのは分かつ
ていたが。

「まあ小さいのはつかだな。小さいのは川に返してる。だからバケ
ツにいっぴってわけじゃないな」
小さい魚はリリースすれば成長して大きくなるから釣りが楽しくな
る。

「そうかしら? 十分すぎるほど釣つていると思つけど」
紫がバケツの中身を見ていう。

「そうか? 僕にとつては少ないけどな」
しゅつと糸を川に再び垂らす。

「あら? ・・・ フフッ、これは太公望もびっくりね」
紫が竿を見て言つ。

まあそれもそうだろ? この竿は少し丈夫な木の枝に靈氣の糸をく
くつつけているだけなのだから。

つまりどこぞの故事の太公望みたいに針と餌がついていないのだ。
尤も太公望は釣りをしていたと言つよりもその國の王に目をつけら
れる様に釣りをしているように見せかけていただけらしいが

「これでもコツをつかめば釣れるんだよ。・・・まあ靈力やら妖力やらを自由に扱えなきゃ無理だがな」

「・・・それで何のようだ？別に釣りを見に来たわけでもないんだう？」

「・・・そうね。本題に入りましょうか。簡単に言つわ。幻想郷での戦い方が変わったわ。」

「何だそんなことか。その戦い方ってのはスペルカードルールだろ？」

「あら？情報が回るのが早いわね？」

「まつたく・・・俺をだれだと思つているんだ？その会話は聞いてたぞ」

能力をちょいと使えばそれぐらい何のわけもないわ。

「結構強力な結界を張つてはなしあつたのにね・・・やつぱりあなたにはあの程度の結界じゃ無理ね・・・」

「まず俺を結界程度で押さえよいつてのが愚の骨頂だな」

正直俺の能力なら基本的に何でもどうともなる。

「それもそうね。・・・そういうえばあなたは話し合いを聞いていたのよね？じゃあスペルカードはもう作つてあるのかしら？」

「ん？まあな。4・5枚だが作ったぞ？まあいつ使うかは分からんがな。・・・そういうえば他に作ったルールはどうなったんだ？複数作つたんだろ？」

「他のは・・・無理ね。流行りそうにないわ。あくまで遊びだから単純なとかで言つたらスペルカードルールが一番みたいよ」

「ふーん・・・まあいいか。一つで統一できそうならそれを妨害する意味も無いだろ?」

「やうね。そのほうが覚えやすいだろ?」

「その時だった

サササーっと紅い霧のようなものが流れてきた

「なんだ。もう行動を起し出すつもりか

「・・・何のことかしら?」

「どいかのばかが性慾りもなくまた異変を起し出すみたいだぞ?」

「・・・分かつてゐなら事前に止めてくれてもよかつたじゃない?」

「どうせほおつて置いても博麗の巫女が解決に行くんだからいいじやねーか」

「まああなたらしいけどね・・・むし、私は行くわ。この異変が幻想郷にどひ影響があるのかも考えたりしなくちゃいけないし。」

「ん、どうか。俺はもう少しここで釣つてるつもりだから困つたらこよー」

俺の言葉に対して紫はスキマに入りながら「やうやくせてもらうわ

と語っていた。

それでもう少し釣りをするかね。

恐らく紫が来るのは異変が終わった後だ。それまで釣りエンドレスとこのものいじじゃないか。

いつて日常のよつで非常な日々は流れていぐ。この異変がその非常じつかわるのか。楽しみこれからいかがせ?

第2ハチ話 ハスペルカードルールと異変の兆候（後書き）

第2ハチ話どうだったでしょうか？

大分短いですね　はい

上手く書けなくてモチベが全然あがらん・・・

ひどい時なんかメモ帳開いて内容考えてるうちにメモ帳閉じてます
からね・・・

それとSAIを使って絵を描いたら意外と楽しかったといつのも問題ですね

どうしても意識が一 よりしければPixivに投稿してあるので
見てください

さて次話の構成どうしよう。どうしよう

こんな筆者ですが今後ともよろしくお願いします。

感想や批判アドバイス誤字脱字などありましたらいつも通りお待ち
しております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4837n/>

東方適応志

2011年8月10日08時43分発行